

#李徴のてえてえ

天音 遊一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Vの者！〜挨拶はこんばん山月！〜の劇中V t u b e rのFA小説です  
初投稿ですが、自分なりのてえてえを出来ないなりに表現してみました

遅筆で続編が続くかどうかすら未定ですが、てえてえが極限に高まった時に、続編が出るかもしれません。

### (注意事項)

- ・作者の文章能力はそれほど高くありません。
- ・大まかな設定は本作を準拠しているつもりですが、細かい所で設定違い・解釈違い

がある可能性があります。

# 目次

ミルクココアとナイトメア | 1

曼珠沙華とフキノトウ | 11

ヒヤシンスと罰ゲーム配信 | 18

壁一枚の距離感 | 33

Ephemera of Paris

daisy | 49

今夜のレオ飯 | はじめての一皿 |

64

今夜のレオ飯 | 2人で挑むやり直しの

味 | 71

リワードフォーユー | 87

アデイショナルタイム | 99

ヤドリギとパイとチョコレート | 109

The Last Day of.....

122

エーデルワイスをもう一度 | 145

# ミルクココアとナイトメア

夢を見た……。

幼い時のあたしが一人で泣いている夢……。

周りは暗くて、何も見えなくて、誰もいなくて……。

どれだけ泣いても、何も変わらなくて、それが悲しくて、また泣いて……。

泣き続けていると、黒いナニカが目の前に現れて、あたしを包み込んだ。

夢は包み込まれた瞬間に終わってしまう……。

「眠れない……」

レオとの夕食の後、定期的に行っている音ゲー配信を終え、眠りについたのは良いものの、さつき見た夢で突然目が覚めてしまった。

「こういう時は、エゴサして眠たくなるのを待てばいいんだけど、明日は打ち合わせだから、しっかりと寝ないといけない……」

眠ろうと気持ちを落ち着けようとするも、さつきの夢で眠りにつくことができなくなっていた。

「ん〜、こういう時は何か温かいもの飲むとぐっすり眠れるんだけど、あたしの部屋にそんなものは……。つて、冷蔵庫にはエナジードリンクと飲みかけのジュースとかお菓子ぐらいしかなかった。牛乳とか飲みきれなくて腐らせちゃうつて、レオに言われたっけ……。あつ、そうだ。レオの部屋なら何かあるかも。牛乳は有ると思うから、ホットミルクは作れるかな……」

ゆっくりベッドから出て、レオの部屋の鍵を暗闇から探し出し、あたしの部屋の戸締りをしてから、隣のレオの部屋へと向かった。

レオの部屋に入ったあたしは、家主を起こさないように、こつそりと冷蔵庫から目的のものを探していた。

「有った有った……。あとは、コップを取り出して……」

「はえ……？ 夢美、何してるの？」

「ヒッ！ 起きてたのか、驚かすなよ……」

電気が落ちた部屋から、静かにレオが出てきた時は、心臓が止まるかと思った。

「驚いているのは、こつちだって。泥棒かと思ったよ」

「起こさないようにしてたんだけど、起こしちゃって、ごめん」

「気にしないでくれ。夢美は喉乾いたの？」

「ちよつと眠れなくてね……。それで寝つきがよくなるようにホットミルクを飲もうかなってね」

「そういうことなら、ホットミルクよりも寝つきが良くなるもの作るから、座って待って。俺も変に目が覚めたから、2人分作ろうと……」

「ありがとう……」

レオに促されて、いつも食事に使っているクッションに座って、レオが来るの待った。

レオがとっておきのものを作っているまでの時間は、真夜中のせいなのかいつもと違うように思え、とっておきを作ってくれる嬉しさであたしの心がこそばゆくなっていた。

「夢美、お待たせ。はい、特製ミルクココア」

「美味しそう。ありがとう」

レオから手渡されたカップには、温かいミルクココアが注がれていた。心なしかカップから伝わる温かさは、いつもと違った温もりを感じた。

「眠れない時はいつもこれを飲んでる。ホットミルクでも良いんだけど、なんかこっち



の方が体に合ってるさ」

「そうなんだ。それじゃ、いただきます」

「いただきます」

レオが作ったミルクココアがやっぱり甘く、牛乳も多く入っているのもあつてか、ココア特有のほろ苦さが上手く包み込まれて、優しい味がした。

「久しぶりに作ったけど、おいしい」

「うん、おいしい。ホツとする……」

「それにしても、珍しいな。こっそり部屋に入って、夢美が何か作ろうとするなんて」

「うん、今夜が初めて。ちよつと怖い夢を見ちゃってね。それが変に頭に残って、眠れなくって……」

「そうか……。俺も怖い夢で眠れなくなることって、アイドル辞めた時とか結構あつたから、他人事とは思えないな」

「色々あつたって言うってたもんね。詳しくは聞かないけど」

「ありがとう」

レオのどこか浮かない顔をあえて見ないように、ミルクココアを飲み進めていた。

「飲んだからもう寝るけど、カップは明日洗うから流しに置いておいて。それに明日は打ち合わせなんだから、早く寝ろよ」

「は〜い」

レオはベッドに入り、しばらくするとレオの寝息が静かに聞こえるようになった。

「は〜、おいしかった……。それに、温かった」

ココアの余韻に浸った後、あたしは眠っているレオに視線を移した。

「レオ、いつも、あたしを助けてくれてありがとう……。二日酔いが酷かった時に看病してくれたし、食あたりにあった時は危険なベランダから部屋に入って助けてくれたり……」

レオが眠っているという気の緩みなのか、ココアのお陰で少し眠気が来たことによる

心のリミッターが外れたのか、今までのレオへの気持ちをおぼしていった。

「レオはあたしが背中を押してくれたって感謝してるって言ってたけど、感謝してるのは、こっちの方だよ。つたく、人の気持ちも知らないで、呑気に寝ちやつて……。そんなライオンには、お仕置きが必要だな、そうに違いない」

あたしはベッドの空いている所に上がり、レオの顔を覗き込み、彼の頬を指で軽くすぐった。

「ほくら、起きないと、くすぐっちゃうぞ〜」

「んっ……」

「ふふっ……。可愛い……」

くすぐった後の反応を楽しんでいたりして、しばらくレオの顔を眺めながら楽しんでいた。

「これなら、どうだ……。こしよこしよ……」

頬以外にも、鼻や耳を指先でくすぐって、レオの反応を楽しんでいた。

そして、ひとしきりくすぐり終わると、あたしはレオの寝顔を覗き込んでいた。

「本当に可愛いな……。可愛い……。可愛い……」

レオの寝顔を見ていると、あたしの心は温かくなっていき、次第に意識が遠くなっていき、あたしはレオのベッドの上で眠りに落ちてしまった

「Z z z z z ……」

「ん……。なんか、身体が重いな……。!？」

レオは目覚めた時に感じた身体の違いの正体に目をやると、そこには自分に寄り添うように穏やかな表情で眠る一人の眠り姫がいた。

「俺が眠っている間にベッドに上がって、そのまま眠ったのか。特に何もされてないから、ちよつと遊んでやろうって思ったんだろ。さて、そろそろ朝食を作ろうかな」  
夢美を起こさないようにゆっくり体を起こし、朝食をつくるべくキッチンへと向かった。

「ん……。レオ……」

眠り姫の穏やかな寝言は、部屋に小さく響いたが、誰にも届くことはなかった。

夢を見た……。

あの時見た悪夢と同じ……。

真つ暗な場所で幼い時のあたしが一人で泣いている……。

黒いナニカがあたしの前に現れて、あたしを包み込んだ……。

でも、今回は違った……。

周囲に獣の咆哮が響きわたり、暗闇と黒いナニカは霧のように消え、周囲は光に溢れ、目の前には雄ライオンが1匹、あたしを見守る様に立っていた。

その姿を見て、あたしはどうしようもなく安心して、さっきまでの悲しみの涙は嘘のように消えて、自然を笑みを浮かべていた。

## 曼珠沙華とフキノトウ

バラレオの2人と一緒に行った池袋は楽しかった……。

一人の人間として私を見てくれるから……。

“有名芸能人の娘”じゃない、“お金持ちの子供”じゃない、“手越優菜というただ一人の私”として……。

バラレオの2人は私にとって陽だまりみたいで、2人といると私は私でいられた……。

2人のでえてえが見られるだけで、心が温まった。

レオの優しい笑顔が大好きだ。

夢美の細かい心づかいがたまらなく大好きだ。

2人の優しい空気が大好きだ。

でも、それは私にとって罪から目を背けていただけだった。

高校生の私がした許されない罪から目を背けていただけだった。

ステージ上で歌って踊っている狩生さんを見つけて、私は「思い出した”。

私の居る場所はバラレオのポカポカとした穏やかな陽だまりなんかじゃなかった。

灼熱の炎が燃え上がった処刑場だったことに気が付いた。

捻くれて、世の中舐め腐ったツケがとうとう回ってきたんだ……。

ああ、やっと、裁かれる……。



ああ、やつと、裁いてもらえる……。

煽って、焚きつけて、炎上させた私が、地獄のような炎に焼かれて裁かれるなんて、私にはお似合いよね。

私が地獄に落してしまった狩生さんが裁いてくれるんだから、これ以上相応しい処刑人はいないよね。

い。今すぐこの地獄のような炎に身を投げてこまれて、焼き尽くされて、消えてしまいたい。

地獄の炎で私の体を、私の罪を全て焼き払って！

焼き払われる姿を見て、狩生さんがあの時の罪を許ししてくれるなら、本望。

ああ、やつと、楽になれる……。

さあ、あと一步踏み出せば、私は裁かれる。

真つ赤に燃え盛る地獄のような炎に飛び込めば、私の罪は裁かれて、全てが終わる。

さあ、一步踏み出せ、私。

…

…

…

…

…

嫌だ……。消えたくない……。バラレオの陽だまりをいっぱい浴びたい……。

また一緒にシヨッピングしたい。また一緒に外出して遊びたい。また一緒に食事したい。

またコラボ配信したい。一緒にゲームをしたい。3人でゆったりと雑談配信をしたい。

バラレオのてええを感じたい。バラレオが幸せになっていく様子を見ていたい。

ゆなっしー時代のファンのレオのお姉さんに会いたい。

今から裁かれようとしているのに……。

あと一步踏み出すば、全てが終わるはずなのに……。

この気持ちは何……？

私の体は、どうして動かないの……？

ああ、私は生きていたいんだ……。

でも、こんな私が生きていてもいいのかな……？

屑で世の中舐め腐って、狩生さんを地獄に落した私が……。

ねえ、レオ、夢美……。一人のライバーとして認めてくれていたんだったら、私の過去の罪を裁いてくれるんだったら、こんな屑な私をもう一度愛してくれるのなら、私の全てを捧げてても良い……。

私を助けて……。

## ヒヤシンスと罰ゲーム配信

最近、色々なゲームや歌枠で配信をしていたが、これほど気の進まない配信は初めてだ……。

いつもは夢美とのコラボ配信は何度もしているから特に気苦労とかはしないが、今回は配信開始前から精神的に疲れる……。

レオは、いつものように配信用の椅子に座り、配信ボタンを押し、いつものように配信を始めていた。

ただ、いつも用意されている夢見のための椅子は今回は用意されず、夢美は恥ずかしく、そうに「レオの膝の上に座り」、身体が落ちないようにレオの首に腕をかけていた。レオは、そんな夢美を落とさないように、やさしく腰に手を回していた。

「袁△のみなさん、こんばん山月〜！ バーチャル隴西の李徴の獅子島レオです」  
「み、みんな、こんゆみ〜！ 茨木夢美でえす」

「こんばん山月」

「こんゆみ〜」

「初手、バラレオてえてえ」

「はい、と言うことで、今日はずきいちにじライブで決まった罰ゲーム配信で、夢美との幼馴染コラポ配信で、夢美は今膝の上に座ってます。かなり恥ずかしいです」

「正直メチャクチャ恥ずかしいんですけど、まひる先輩に言われてしまったので、素直に罰ゲーム配信をしたいと思います」

「てえてえ」

「てえてえ」

「てえてえ」

「最初からてえてえとか期待できる」

「もう座っていると、刺激が強い」

何故、レオと夢美がこんな配信をすることになったのは、一週間前のかぐや先輩とま

ひる先輩とのコラボ配信の月一にじライブまで遡る……。

(1週間前……)

「あなた達2人は、「てえてえを過剰供給しているのにもかかわらず、お互いの関係が一向に進まない」罪で有罪です」

「なんですか(なんで)、かぐや先輩！(まひる先輩！)」

「いや、流石にこの罪は妥当ですね」

「そうですね」

「バラレオの息ピッタリでてえてえ」

「残当」

「えっ、この2人付き合ってたの？」

「逃げられんぞお」

「そして、罰ゲームは「夢美を膝の上に載せて、二人でイチヤイチャコラボ配信」です」  
「なんですか(なんで)、かぐや先輩！(まひる先輩！)」



「イチャイチャコラボ配信助かる」

「てえてえが高まりすぎて、タカになったわ」

「本当になんでなんだよ……」

（時は現在に戻り……）

「今回はコラボ配信なんですが、この罰ゲームの監視人としてもう一人この配信に参加していますので、それじゃ挨拶どうぞ」

「おはっぽー、どうもにじライブの焼き林檎こと白雪林檎です。今回はバラレオのてえてえをこの目で見えるために来ました。すまねえな、みんな。このてえてえは、私が独り占めだ！」

「おはっぽー！」

「後で詳しく教えて！」

「三期生のオフコラボ楽しみ ? 10, 000」

「助かる！」

「独り占めはよくないなあ〜」

「バラレオの2人が、今の体勢を崩そうとしたら、すぐ警告するからね。かぐや先輩やまひる先輩に監視するようにって言われているからね、しっかりやってくよ」

「何してくれてるんですか、かぐや先輩」

「まひる先輩もですよ……」

「あはは！ 2人して同じリアクションwww」

オープニングトークが終わり、コメントの質問を答えたりしていたが、2人はどこか緊張した感じが続いたが、しばらくたったら慣れたのか、緊張は次第に解けていた。

「二人の緊張が解けたから、このゲームを2人にやってもらいましょう」

「ん、ゲーム配信の準備はしていないけど、今から準備するのかわ？」

「準備するんだったら、この体勢を崩さないといけないけど？」

「いやいや、このゲームはゲームハードとかを使わないゲームだよ。そのゲームは、愛してるゲームゝ！」

「はえ？」

「何よ、そのゲーム！」

「あのゲームをするのか！」

「知っているのか、雷電!？」

「てえてえ間違いなしだな ? 10,000」

「ルールは簡単だよ。お互いが『愛してる』って、交互に言いあって、先に照れた方が負けっていう『簡単』なゲームだよ」

「なんだよ、そのゲーム!!」

「それって、合コンとかでするゲームだよね」

「うん、そうだよ」

「それを素面でやらせるの?」

「そうだよ。素面がヤダっていうなら、お酒を飲んでたら、できるってこと?」

「いや、酔っててもやらないよ」

「あたしもやらないよ」

「ええ。私見たかったなく。レオの演技力を見たかったなく。まさか、できないって

訳じゃないよね」

「見たい」

「レオの演技とか見たいな〜」

「見たいな〜」

「この林檎、煽りよるwww」

「それに打ち上げ用のお酒を用意しているから、それを飲んでからでも良いよ」

「えっ、お酒用意してくれてるの!?!」

「うん。お高いお酒を何本か持ってきたよ」

林檎は自分の大きなカバンからワインの瓶を1本取り出して、2人に見せつけた。ラベルには綺麗な外国語が記載されていて、明らかに高級感を出していた。

「酔わしてゲームをさせるために高級な酒を飲ませるのか……」

「もつたいたいと思うなら、素面のままゲームをするしかないよね。ねえ、レオ?」

「白雪イイイ!」

「林檎ちゃん……。許さないけど、そのお酒、絶対飲ませてもらうからね」

「へへっ、勿論」

「高い酒を餌に恥ずかしいゲームをさせようとする林檎wwww」

「打ち上げも楽しそう」

「素面のまま、続行！」

「三期生はなかよくて、てえてえ」

「ちやつかり、高い酒を飲もうとするバラギwwww」

「美味しいお酒のためにやるか、レオ」

「夢美、お酒に釣られたか……」

「それじゃ、先攻は夢美からね。きちんと私に聞こえるように言つてね。ジャツチは私  
がするから、私がOK出さなかつたら、もう一回だからね。手抜きはダメだよ」

「はーい。もうこうなつたら、何でもやってやる！」

「ん？」

「今、何でもするって……」

「磯野、ゲームの開始の宣言をしろ！」

夢美は、ゆっくり深呼吸をし、ちよつと真剣な顔をして、レオの耳元に囁くように呟いた。

「あ、愛してる」

「可愛い」

「可愛い」

「緊張している声もまたちようどいい？ 10,000」

「夢美、ちよつと緊張したね。声が引きつってるよ」

「あー、全然ダメか。それじゃ、次、レオの番だよ」

「ハイハイ、それじゃちよつと待てよ」

レオは、かつてのアイドル時代の演技を思い出し、真剣な表情で夢美を見ながら、甘く囁いた。

「愛してるよ」

「あゝあゝあゝあゝあゝ！」

「夢美 O U T !」

「やだ……男なのにときめいちゃった」

「これがにじライブのイケライオンの全力か」

「これで、俺の勝ちだな。これでこのゲームは終わりだな」

「何勘違いしてる？」

「はえ？」

「まだこのゲームは終了してないぜ！ 速攻魔法バーサーカーソウル！ このゲームは、私が満足するまで永遠に続く！」

「ちよ、待てよ！」

「言つたじやん。〃私がOKするまで、もう一回〃だつて」

「あとで覚えてろよ、白雪イ……」

「理不尽すぎるwww」

「いいぞ、もつとやれ！ ? 3 0 , 0 0 0」

「ドロー！モンスターカード！」

「それじゃ、もう一回。それじゃ、夢美から」

「はい……。スウゥ、ハアゥ……。レオ、愛してるよ」

「俺も愛してるよ、夢美」

「ハウ！」

夢美の渾身の告白も、レオのノータイムのカウンター告白をしながら、頭を優しく撫でた。

「夢美 O U T！」

「即カウンターで負けて草」

「※お互い密着した状態です」

「てえてえ」

「てえてえ」

「ときめいちやった」



「ちよつと、レオ。告白しながら、頭撫でるとか汚いぞ！」

「ん？ 何のことかな？」

「レオ、しらばつくれやがって」

「夢美の反応で、このゲームの攻略法が見えたよ。林檎が満足しなくても、<sup>//</sup>夢美を満足させれば、<sup>//</sup>良いだけの話だろ？」

「ぐぬぬ」

「えつ、あたしは何回このゲームを続けないといけないの？」

「夢美が限界を迎えるまでだな」

「えつ……」

「まさかの耐久戦wwww」

「夢美対レオじゃなくて、林檎対レオだったwwww」

「夢美はとぼつちりwwww」

「やだ、これは夢美の恥ずかしいだけのゲームwwww」

「いや、これはただのカップルのイチャイチャでは？」

「えつ、もつとてえてえくれるんですか！」

「よし、その勝負受けて立つよ、レオ」

「白雪、後悔するなよ」

「えっ、あたしの事は？」

「知らない」

「ひびく」

その後、ゲームは続行され、5回程した段階で、夢美が限界に達し、レオの勝利でゲームは終わり、配信はレオと林檎が締めて終了となった。

「それにしても、2人ともあたしのことを無視するのは、どうかしてる」

「それは、白雪が勝手なルールを押し付けた訳で」

「いや〜。そのルールを納得した2人にも落ち度があるよ」

「確かにそうだけど……」

「騙されるな、夢美。今回は、白雪が俺たちの反応を楽しみたいだけだぞ」

「バレちゃったか、テヘ」

「可愛いジェスチャーしてもダメだぞ」

「ですよ〜。私からの謝罪の気持ちとして、お酒飲んじやおう!」

「待ってました!」

レオの告白でへロへロになった夢美を優しく2人は介抱し、少し元気になったところで、コラボ放送の打ち上げが始まり、罰ゲーム配信の夜は過ぎていくのであった……。

なお、この罰ゲーム配信は、色々な所の切り抜き動画が作られ、バラレオでえてえは世界中に拡散され、レオと夢美のマネージャーの飯田と四谷からは感謝され、お礼を言われたりしていた。

同時接続数も3人の同期生のコラボ配信の中ではブツギリが多く、送られたスパチャも7桁に達し、SNSでトレンド入りし3人のチャンネル登録数がさらに増え、後に伝説の罰ゲーム配信となった。

そして、バラレオのその後はと言うと……。

「ねえ、レオ……」

「何？」

「もうちよつとこのままでも良い？」

「夢美が満足するまででもいいよ」

「ありがとう……。それじゃ、もう一話分くらい座つてようかな」

「どうぞ」

時々、2人とも配信をしない休日に夢美がレオの膝に座り、一緒にアニメを見たり、この体勢のままお昼寝をすることが増えたらしい……。

## 壁一枚の距離感

「夢美、これ見てみろよ」

「ん、何〜？」

2人ともレオの部屋でくつろぎながら、レオはポケモンをして、夢美はその画面をレオの肩から少し顔をのぞかせながら覗いていた。

「この相手、凄い戦術を使ってくるんだよ」

「えっ、どんなの？」

「これされると、ほんと厄介なんだけど、うまくいかないことも有るんだけど、こんなにうまくされるとは思わわなかったよ」

「ふーん」

「確か夢美、このポケモン育ててたっけ？」

「確かに持ってたかな」

「この戦法も面白いから、採用してみるのもいいかもな」

「レオがそういうなら、考えようかな」

「やってみようよ、な」

「わかった」

レオは夢美の顔を見ようと顔を向けた瞬間、何かに触れたのを感じた。

夢美はレオが自分の方に向いていた瞬間、何かに触れたのを感じた。

「!?」

お互いの「唇」が触れてしまったのを、お互いが理解してしまった……。

「い、い、今……!!」

「落ち着け、夢美！」

「ヒッ！」

「落ち着け、あれはただの事故だ。ただ、ちよつと当たり所が悪かっただけだ」

「そ、そうよね！」

「だから、あんまり深く考えなくても良いよ。俺も気にしてないから。アイドル時代で

も、キスシーンは何回かあったから気にしてないよ」

「で、でもさ。確かにちよつとレオに寄りかかってたあたしも悪かったって」

「そんなことないって。ちよつと気が緩んでただけだって。次から気を付けなければいけないだけだって」

「そ、そうよね」

「そうだって。とりあえず、今回はどつちも悪かったってことで。今日は、デザートにプリンを用意しておくよ」

「やったー！」

2人の間で解決させ、レオは再び *switch* に視線を移した。

「(でも……。ちよつと、近すぎたのかもしれないよね……。Vの上では『幼馴染』だけ、ただ学校が同じなだけで、ただの同期なだけなんだよね……。最近ちよつと調子乗ってたかな……。ちよつと、距離感を考えようかな……。)」

「(ちよつと)」

「ごちそうさま。プリンもおいしかったです」

「それじゃ、食器洗ってくる」

「それじゃ、あたし、部屋に戻るね……」

「そう？。いつもはこれから寛いでいたりするけど」

いつもは夕食後は部屋でくつろぐことの多かった夢美が、今日は夕食後そのまま自分の部屋に戻ることに、レオは少し驚いた。

「うん。ちよつと明日の配信の準備とか有るから」

「わかった。頑張つてな」

「うん……」

「明日も朝食作るから、徹夜はあまりするなよ」

「わかった」

足早に部屋に戻った夢美は、自分のベッドで横になり、自分のスマートフォンを操作し始めた。

彼女の顔は、無表情で何かを考えているようであった。



翌日から、夢美はレオと一緒に食事を取ったり、食後は自室に引きこもる様になり、どこかすれ違いの生活をするのであった……。

(数日後……)

レオと夢美は、毎月の三期生のミーティングで事務所に集合となったが、この日はいつもとは少し違った集合となった。

「あれ、獅子島さん？。茨木さんと一緒じゃないんですか？」

「四谷さん、おはようございます。夢美は、「ちよつと用事を思い出したから、先に行つて」って、少し遅れてくるみたいです。「ミーティングには間に合う」って言っていたんで、すぐ来るとは思うんですけどね」

「わかりました。それじゃ、会議室で待っていてくださいね」

四谷に促されて会議室に向かい、用意されている三期生用の右端の席に座り、会議までの時間をつぶしていた。

「失礼します！」

「夢美、用事大丈夫だった？」

「うん、まあね……。ちよつと、買い忘れてたものがあつてね。コンビニで買ってきたんだけど」

「よかつた。用事を思い出したからつて言つてたから、心配した」

「心配してくれてありがとう。ミーティングはまだみたいだね」

「良かつた、遅刻しなくて」

夢美は左端の席に座り、レオと同じく会議までの時間をつぶし始めた。

その数分後に、再び扉が開き、林檎が入つてきて、レオと夢美に挨拶を交わしていた。

「失礼します。レオ、夢美、おはよう！」

「おはよう、林檎」

「おはよう、白雪」

「間に合つた。ちよつと、早めに行こうと思つたら、思いのほか時間を食つちやつてさ。まあ、何とか間に合つたから、まあ良いか」

「間に合ってるけど、次から気をつけろよ」

「はい、わかりました。それにしても……」

「ん？何かあった？」

「いや、何も」

林檎は、レオと夢美が席を離していることに違和感を感じた。

「いつもなら隣に座って、仲良く談笑して、てえてえを振りまいているはずなのに……」

違和感を拭えないまま、林檎は真ん中の席に座った。

「では、今日のミーティングはこれで終了になります。また、何かありましたら、連絡お願いします」

「「お疲れさまでした」」

「それじゃ、あたしはお先に失礼します」

「お疲れさまです」

会議はつつがなく終了し、解散の時間となり、夢美は足早に会議室を退室した。

「ライバーとしての「茨木夢美」と、あたしとしての「中居由美子」はきっちり分けな  
いといけないんだけど、うまく整理できない……。今まではそんなこと考えることな  
んで無かったのに……。でも、何だろう？。この胸の苦しさは……」

夢美は、事務所の入り口を出て、やや曇った表情のまま帰路へと付いた。

一方、事務所では……。

「レオ、夢美と喧嘩した？」

「別に夢美とは喧嘩してないけど？」

「いやだって、いつも会議の席が隣同士だし、仲良さそうに話してるのに、今日に限って  
席は離れているし、全く話さなかったし、どこかよそよそしいとかかなんというか」  
「確かにどこかよそよそしいかったな……。確か、あの時からかな……。でも、あれはあ  
の時お互い気にしないってことにしたのに」

「何？何が有ったの!？」

レオは数日前に起きたことに対して、林檎に簡単に説明をした。

「いや〜。てえてえですな〜。偶然とはいえ、キスしちゃうとはね〜。ねえ、本当に付き合ってないの？。日常的にベタバタしてるのって、もう幼馴染じゃなくてただのカップルじゃん」

「カップルじゃないからな」

「まあ、それは置いといて。今回は、たぶん「お互いの距離感」を夢美が過剰に意識したからなんじゃない？」

「距離感か……」

「レオも夢美も友達にはとことん甘いからね〜。たぶん、お互いどこか甘えてたのが、今回のことでちよつと悪い方向に転がっただけで、距離感が近いのは別に悪いことじゃないとは思うけどな〜」

「あたしにとつてはね〜。てえてえ〜、てえてえ〜」と小さく呟いた林檎を尻目に、レオは自分と夢美の距離感について深く考えていた。

「夢美なら良いかなって思うところはあったかもしれないな……」

「だから、ちゃんと話し合えば、解決すると思うよ。お互い、子供じゃないんだしさ。かつてのあたしと違ってさ。夢美もきちんと話は聞いてくれると思うよ」

「でも、ここ数日ご飯も一緒に食べてないからな。なんか避けられてるみたいでさ」

「うーん。なんか、昔のあたしみたいなことになってるよね」

「無理矢理にでも、夢美の部屋に入るか？」

「いや、別にそこまでする必要ないんじゃないかな。」「距離感」を意識しているだけで、レオとは離れるつもりはないと思うから……。そうだ！。これなんかどう？。

……………」

林檎はレオの耳元でひそひそと作戦の内容を教えた。

「……………。なるほど、それなら問題ないな。それじゃ、今夜してみるよ。ありがとうな林檎」

「バラレオがてえてえじゃなかったら、こつちが調子悪くなっちゃうからね。それに、これも雑談のネタになると思えば、儲けものだよ」

「少しはぼかせよ。また炎上するぞ」

「大丈夫、大丈夫。バラレオが事故チューしたところで、「てえてえ」か「結婚いつですか?」とかのコメントが増えて、ちよつと多めのスパチャが貰えるだけだつて。炎上なんてありえないよ」

「いやいや、結婚つて飛躍しすぎだろ……」

「ふふつ、そうかな。私から見たら、もう結婚間近にしか見えないけどな」

「冗談はいい加減にしろよ」

「は〜い」

その後、林檎と軽く作戦の確認をして、レオは帰路についた。

獅子島レオ：ベランダでちよつと話そう お酒用意してるから こっちに行きたくなかったら、自分の部屋のベランダで良いから

数時間後、レオは夢美にメッセージを送った……。

夢美を呼び出すために、夢美の曇り空を晴らすために……。

「夢美、来たか？。お酒はそっちのベランダに引つ掛けてるから取って」  
「レオ、どうしたの？。お酒なんか用意しちゃって」

自室のベランダに出てきた夢美とレオはパーティーションを挟んで、お酒を飲みながら会話を始めた。

「どうしたの？」って、聞きたいのはこっちだよ。あの時から、ちよつと距離を置かれてるみたいでさ」

「……」

「距離を置かれてることについては別に良いんだ。一人になりたい時もあるだろ。そういう思いも汲み取るよ、「幼馴染」なんだからさ」

「ッ。でも、あたし達の関係は、作られた関係……。『本物』じゃない。あたし達は本当の「幼馴染」じゃない。偶然、同じ学校にいただけのただの「同級生」なだけ！。なのに、ちよつとした事故でキスみたいなことしちゃって！。それで、ちよつと嬉しいとか恥ずかしいって思った自分が嫌で！。レオだって、あたしとああいふ事しても全然嬉しくなんて……！」



夢美の声が少しずつ強くなっていく。

「それは違う。何も思わない訳ないだろう？。そりや、ドラマでもキスシーンはあつたけど、それとこれとは別問題。俺だつてそりや、少しは驚いたよ」

「!？」

「夢美は俺がライバーをしている時から、ずっと傍にいてくれた。ライバーで燻つていた時は引つ張つてくれたし、林檎の引退騒動の時は一緒に動いてくれた。夢美には感謝の気持ちしかないんだ。そんな恩を毎日の食事程度じゃ返しきれないさ」

「えっ……。でも、あの時……」

「夢美に罪悪感を抱かせないつてのも有るけど、照れ隠しに決まつてるだろ。特別な感情を抱いている相手とキスとかしたら、俺だつて動揺はするよ」

レオは静かに言葉を紡ぐ。

「それに、『茨木夢美』は、俺にとって世界に二人しかいない「同期」だ。そして、俺にとって「大切な人」だ。「設定」だとかなんとかは関係ない」

「レオ……」

「それに、今の俺らの壁はこのパーティーションぐらいしかないだろ？。それに夢美が辛そうな時は、こんな壁なんて簡単に越えてみせるよ。夢美が食あたりで倒れた時と同じようにさ」

パーティーションを軽く小突きながら、夢美に自分たちの壁の薄さを暗に示した。

「……………」

「あれ…………？。夢美、大丈夫か？。夢美く？」

身体を少し身を乗り出して、夢美の部屋を覗き込んだが、ベランダに夢美の姿は見えなかった。

「レオー！」

「ゆ、夢美!?!」

レオの背後からの声に振り替えると、目の前には赤ら顔でやや涙目の夢美が立っていた。

「レオ、ごめん……。本当にごめんなさい！」

「大丈夫だよ、夢美」

感情が昂りレオに抱き着いた夢美を、レオは優しく慰めるように頭を撫で、夢美を落ちさせようとした。

レオの優しさに、夢美は静かに涙を流した。

「レオ……。ごめんね……。ありがとう……」

「良いってことよ。落ち着いたか？」

「うん」

「よし、それじゃ、今夜は飲むぞ。飲み物いっぱい買ってあるし、おつまみも用意できるぞ」

「やった！」

そうして、バラレオの仲直り？のための飲み会が始まるのであった……。

「やっぱり、このポケモンとこの技の組み合わせを気に入っているんだけど」

「うーん、ここのバランスが大切なんだけどな」

「やっぱり、バラレオはこうじゃないとね！。てえてえ」

数日後、二人の様子を覗き見しようとしてレオの部屋に上がり込んだ林檎は、身を寄せ合っている間にゲームに勤しみ、無自覚にイチヤイチャしているようにしか見えないバラレオの姿を見て、てえてえを強く感じるのであった。

## Ephemera of Paris daisy

「うわっ。これが竹取かぐや宛に送られるファンからのプレゼントか。流石、にじライブを引つ張つてきたVだけはある……。あたしもプレゼントは貰ったことあるけど、これだけの量は見たことないや」

「いっつも、こんだけ仰山貰つても困るんやけどな」

「でも、流石です」

「それにしても……。ちよつと恥ずかしい所を見られちゃったかな。自慢してるみたいでさ」

事務所での打ち合わせがたまたま済んだ諸星、レオと夢美の3人は、事務所の机の一角を牛耳る様に高く積まれた“竹取かぐや”宛のプレゼントを見て、感嘆の声を上げていた。

「本当はもつと有るんだけど、電子機器とか食料品に関しては、申し訳ないんだけど捨ててるんや。規則できっちり決まっているからな」

「わかります、諸星さん。俺もアイドル時代にそういったプレゼントは、処分しているって話がありましたよ」

「おつ、流石経験者」

「え〜勿体ないな〜。電子機器とか高そうなのに〜」

「夢美、電子機器こそ今の時代怖いんだぞ。盗聴器や隠しカメラが仕込まれている可能性だってあるんだから。そこから、身バレすることだってある。食料品なんかは、誰がどうしたかわからないものを食べるんだぞ。もし、それに毒とか仕込まれていたら……」

「確かにそうだよね……。勿体ないって気持ちはあるけど、それが毒だったらと思うとね。盗聴も怖いし」

「だから、気をつけるよ」とレオは優しく釘を刺しながら、プレゼントの一つ一つを見ていた。

「ん？あれ？これは……。葉？」

レオは、詰まれたプレゼントの山の麓にさりげなく置かれている一枚の葉に気が付い

た。

その葉は、マーガレットの花が描かれ、ラミネートされた如何にもお手製のものであった。

「葉のプレゼントつてのは、見たことが無いな……。なんじゃこりや？。30—2—1  
1、45—12—3……？」

レオがその葉に手を伸ばし、葉の裏を確認したが、その裏には、数字の羅列が書かれているだけであった。

「諸星さん、この葉は何ですか？」

「あく、それは貰っておくわ……。もうこんな時期か……」

「そ、そうですか、どうぞ」

「ありがとな。それじゃ、私はこれから仕事に戻るわ。配信頑張りや」

「わかりました。頑張ってください」

「頑張ってください」

諸星は、レオから受け取った葉をスーツの裏のポケットにしまい、仕事に戻っていった。

「何だったんだろうな、あの葉……」

「ん？葉が何だって？」

「いや、大したことじゃないんだけどさ。あの葉はなんか普通のプレゼントとは違うんだよね。裏に変な数字が書かれてたし、諸星さんが何も確認もせずに、スーツの裏側のポケットにしまったんだぞ」

「確かにちよっとおかしいよね。内容は確認するくらいはするよね。特に竹取かぐやレブルの人となると、そういうのって人一倍気にしないといけないよね」

「謎の葉の事なら、あれは約3年ぐらい前から、定期的に事務所にファンレターと一緒に送られてきたプレゼントなんだよね」

「そうなんだよ」と言うレオの後ろで、かぐやのマナージャーの飯田が2人に声をかけてきた。

「飯田さん、お疲れ様です。その話って本当ですか？」



「獅子島さん、本当だよ。毎回同じ人から送られてきてて、印象的なんだよ。ファンレターの内容は普通で、葉も市販の機材でラミネートされたもので、変な数字の羅列以外は変な所は無いから、そのまま渡しているんだけどね」

「へえ、変わったプレゼントですね」

「そうだよな。別にバンチョーが本を読むなんてこと、あんまり配信でも言っていないし、わざわざ“葉”を贈るってのはおかしい。しかも“定期的”なのが、もつとおかしい」

「本当にそうなんだよね。勿論、諸星部長も読書はするから、葉は使うだろうけど、定期的に送ってくるのも不思議で、会社内では「送り主は、諸星部長の恋人」だなんて、噂が流れたくらいですよ」

「まあ、その噂も部長の圧力で、誰も話さなくなったから、有耶無耶になったんだけどね」と、飯田は軽く鼻で笑いながら、最後に添えた。

「諸星さんは、ライバーとしても社会人としてもきっちり分別の付けられる方ですし、立派な社会人ですし、もしその噂が本当だとしても、別に良いんじゃないんですか？」

「レオからそんな言葉が出るなんて意外」

「そりや、推しに恋人がいるんだったらシヨックだけど、諸星さんなら恋人がいても全然不思議じゃない年齢ですし……」

「おっ、誰に恋人がいるって〜」

「!?!」

「ヒッ!」

「あっ……」

レオの背後から諸星が静かにやってきて、レオの左肩に手を載せていた。その顔は笑顔ではあるが、そこから明らかな怒気がにじみ出ていた。

「獅子島レオさん。女性のプライバシーに踏み入るなんて、躰がなっていないんとちやうんか?」

「いえいえ……」

「それに、飯田ア?。まだ、仕事が残つとるんと違うんか?。こんな所で油売ってる時間なんてないやろ?」

「すみません!!」

諸星の濃厚な怒気を含んだ優しい声は、レオを黙らせ、飯田は足早に仕事場へと返した。

「はあく。また、変な噂流しよって」

「諸星さん、すみません。変な噂にのってしまっただけ」

「別に構わんよ。確かに『竹取かぐや』のイメージとしては、『葉』のイメージは付きづらいから、変に勘違いされるのは分かってたんやけどな」

「そ、そんなことないですよ。それにマーガレットのイラストなんて、送った人は可愛らしい人ですわね」

「そやな。嫌味ばかりだけどな……」

その後、事務所を後にしたレオと夢美は、自宅に帰るついでに、事務所の最寄り駅の近くの大型書店へと足を運んだ。

「何、この行列は？」

「凄い人だな……。ん、何々？。『赤鯨シエル』サイン会が開催されているんだって」

「赤鯨シエルって、あの『迷探偵ヤンキーガール』の？」

目的の書店に到着した2人は、目の前の大きな列に驚きの顔を露わにした。

「そうそう、あの作品だね。一度バイト先の人から借りて読んだことが有るんだけど、不良少女と迷探偵のコンビがまた絶妙に噛み合っていて、お互いの足りない所を支えあいながら、事件に立ち向かっていく姿は、笑いあり涙ありでかなり読み応えのある作品だったよ」

「推理小説か……。私には難しそうだな」

「そうでもないよ。文章やトリックに関しては、奇をてらいながらも、きちんとわかりやすい説明をしていたから、なるほどっと思わせてくれたよ。それが受けて、アニメ化が決定したみたいだし、新刊の宣伝も兼ねてのサイン会だね。なんか懐かしいな」

「レオもやっぱりそういう事してたの？」

「ああ、サイン会が終わった後に、裏で結構ボロクソに言ってたよ。客の態度が悪いとか色々だね。痛い思い出だよ」

若干、苦虫を噛み潰したような表情をしながら、過去の行動を反省するレオであった。

「うわあ……」

「だからこそ、今があるってことだから、前向きにね」

「そうだね、人生前向きにね」

「それじゃ、買い物を済ませたら、早めに帰るぞ。今日の夜は、配信有るんだから、準備を済ませないといけないだろ？」

「は〜い！」

「今日は夢美の好物を作るから、楽しみにしろよ」

「やった〜！」

バラレオの2人は、通常運転でてえてえを振りまきながら、目的の本を探しに向かった。

一方、その頃……

「もうこんな時期か……。やっぱり、あいつはキザすぎるんだよな……」

仕事を一通り片づけ、休憩している諸星は、プレゼントの葉を見つめながら、過去を思い出していた。

これは、10年前の遠き日の思い出……

「なんか複雑に奇をてらい過ぎて、全くわからないし、文章が分からずらい」

「中学時代からあなたの事は知っていますが、やっぱりあなたのセンスは狂ってるんすね」

「なんやと!」

「痛い、痛い! 殴らないで!」

「うっさいわ、ボケ!」

薄汚れた部屋で男性の執筆した作品を女性が読んで、品評していた。

また、男性側の煽りに腹を立てた女性、彼の腹部にパンチを入れていた。

「あなたがこういう文章を読み慣れていない知ってたからこそ読んでもらいたかった。

色んな人に読んでもらうためにね」

「ま、そんなところやろうな」

「それは半分で、もう半分はこの文章を読んで、頭を抱えるあなたの姿を見たかったんですけどね、ハハハ！」

「あ、っ！」

「痛い痛い！」

「お前みたいな性悪が書いた本なんか、一生売れないぞ」

「言いましたね……。じゃ、私が売れたら、どう落とし前つけてるんですかね？」

「そうだな……。それじゃ、土下座でもしてやるよ。『私の見当違いでした』ってね」

「わかりました。それじゃ、私が売れたら土下座してもらいましょう。それじゃ、ゴールラインはどうしましょう？。あなたのことだから、ゴールラインを後ろにずらされて、結局土下座しないっていう事にはされたくないですからね。さて、どうしましょうかな……」

男性は思案にくれながら、この勝負のゴール地点を考えていた。

「上等ッ！」

「それでは、新刊が出る度にあなたに葉を送り付けましょうか」

「はあ？なんで、葉？」

「そこは考えてください。そして、葉が10枚溜まったらつてのは、どうでしょう？」

「つまり、新刊を10冊出したら、そっちの勝ちつてことか。まあ、ええやろ」

「それでは、首を洗って待っててくださいね。土下座が楽しみだ。ハハハ!!」

「これで6枚目か……。これで、折り返し地点は過ぎたんやな。あいつも頑張ってるんだな」

帰宅し家で寛いでいる諸星は、仕事用鞆から葉を取り出し、小さく呟いた。

その左手には、通販サイトの梱包用封筒が握られていた。

「さて、あいつがどんな作品を書いたか、見てやらんとな」



封筒から「迷探偵ヤンキーガール」の新刊を取り出し、ソファアに座り、その本を読み始めた。

「あいつ、私が新刊を買うことを見越して、必ず必要になる葉を送り付けたんやろうけど、何故、竹取かぐや宛に送りつけたんや？。それに、あいつに竹取かぐやの事なんて、言っていないんやけどな……。もしかして、私のことを調べてた？。まあ、あいつのことだから、声で見抜かれちゃったんだろうな。それに今の職場にいることも、あいつに言ってたからな」

黙々と読み進めながら、ふと、それを止めて、メモ帳とペンを取り出し、葉と小説を交互に見ながら、再び読み始めた。

そして、メモ帳に文字を記入し、一しきり終えると、その文字列に目をやった。

「さて、あの性悪野郎の残した暗号は、なんやろな……。えつと……」

ゆふぐれは

雲のはたてに

ものぞ思ふ

天つ空なる

人を恋ふとて

「……………。なんや、今回は和歌かいな……。自分は平安貴族にでもなったつもりか。調子に乗りやがってな。それにそんな和歌送られたって、気持ち悪いだけやん」

呆れた表情をしながらも、その頬はどこか赤らめていた。

「それにしても、栞の裏の謎の数字は、ページ数と行数、上からの文字数を表しているなんて、ちゃんと本を買わないと分からんやろが……。性悪なあいつらしいわ……。中学時代からの腐れ縁やけど、本当に性悪やな」

彼女の瞳は、どこか遠くの何かに想いを馳せていた。

「また、こっちもファンレターで返してやるかな。それに私は知ってるんやぞ。「迷探偵

「ヤンキーガール」の主人公の不良少女のモデルが私だつてことも。なんや、あいつただのツンデレか。それにやり方が回りくどいし、言葉が一张张面倒くさい。言葉選びもクサイ」

呆れた表情で、ダメだしの言葉を並べ立てた。

「でも、女としては、売れっ子作家に言い寄られるなんて、嫌な思いはせえへんかな。ゲームや漫画の世界みたいやしな。もつと直接的な言葉で言い寄られたら、コロツといつてしまいそうやけどな」

諸星は、思いを寄せられている殿方が作った葉を見ながら、物思いに更けていた。

その後、本はベッドの下の布製のブックケースに収納されるのであった。誰かのお手製の葉を挟んだ他の5冊と一緒に……。

## 今夜のレオ飯　くはじめての一皿く

「今日から夢美の分も作るんだが……。何を作ろうかな……」

レオは、冷蔵庫の食材をにらめっこしながら、夢美に振舞う初めての夕食について、提案していた。

「食あたりから治ったばかりだから、そんなに重たいものを食べさせるわけにはいかなけれど、夢美のことだからしつかり食べたいとは言うだろうし……」

いつもレシピを参考にしていくアプリを立ち上げ、夕食の献立の参考になるレシピを流し読みしていた。

その中で、一つのレシピが目にとまり、そのレシピをじっくりと見始めた。

「……………。厚揚げか……………。ただの厚揚げなら、味が一辺倒だけど、それに野菜あんかけをかければ良いな」

頭の中で、必要な材料と足りない食材を考え、夢美を連れて、スーパーへと足を運んだ。

「拓哉。今日のご飯は、何？」

「ん、厚揚げの野菜あんかけ。なんか食べられないものはあるか」

「特に無いけど」

「良かった。今日の料理は、野菜と量は多めだから、あんなことが有って、重たいものを食べさせられないからね」

「ありがとう」

「まあ、食事の面倒を見るってことは、健康に思い切り関わるってことだから」

2人は、淡々と食材を購入し、帰路についた。

「スーパーの道順は覚えておいてよ。今後、おつかいを頼むかもしれないからね」

「はーい」

「あつ、あそこに可愛い雑貨屋がある」

「ん？」

夢美は帰り道の途中に、小さな雑貨店を見つけ、その店先に向かつていった。

「ここはお茶碗とかお皿とかも売ってるのか。ここで買っておこうと」

「そうだな。予備のお茶碗を使うつもりだったけど、自分で選んだ食器で食べた方が良  
いもんな」

「選んでくるから、待ってて」

「俺もちよつと見てる」

「拓哉く。こつちの茶碗とこつちの茶碗、どつちがいいと思う？」

「うくん。右かな」

「わかった。じゃ、こつちで」

「由美子。どつちの箸置きが良い？」

「うくん。猫の箸置きかな」

「それじゃ、買ってくる」

雑貨店の中で、夢美は自分の食器を何点か、レオも2人分の箸置きを購入し、再び帰

宅の途へとついた。

「さて、そろそろご飯が炊けるから、メイン料理を作ろうつと。材料は、ひき肉、シメジ、野菜、厚揚げ。味噌汁は、玉ねぎで良いかな」

フライパンでひき肉を炒め、野菜とシメジを入れ、ひき肉入り野菜炒めを作り始めた。そして、そこに少量の鶏がらスープを入れて、一煮立ちさせ、その後水溶き片栗粉を入れ、とろみの付いた餡を完成させた。

「味噌汁もそろそろ完成かな……。あと、きざみネギを入れてつと……」

玉ねぎと出汁が入ったもう一つの鍋に味噌を入れて、味噌汁を完成させ、火を止めた。

「厚揚げもそのままフライパンで焼き目をつけてつと……。さて、そろそろ夢美を呼ぶか」

夢美に連絡を入れた後、直ぐにレオの部屋に入って、食事の準備をしてもらった。

「レオ、お箸は並べたよ」

「ありがとう。もうすぐ完成するから」

「はい」

厚揚げの焼き目を確認した後、皿に盛りつけて、その上に野菜あんをかけて、メイン料理を完成させた。

そして、二つのお椀にそれぞれ味噌汁、二つの茶碗にご飯をよそい、メイン料理と味噌汁、ご飯を食卓に置いた。

本日のレオ飯：「厚揚げの野菜あんかけ」

「それじゃ、いただきますをするぞ」

「うん」

「いただきます」



「おいしい」

「あんかけがちょうどいい濃さで、厚揚げ外はパリパリで、中はふわつとしてる。うん、良い出来だ」

「流石、元アイドル。食レポも完璧だね」

「まあね。それよりも、夢美がおいしいって言ってくれて、嬉しいよ」

「うん、ずっとコンビ二弁当で、こういう料理をあんまり食べなかつたからさ。すごくおいしいと感じる。ズズツ……。お味噌汁もおいしい」

「一人暮らししている時に、本当に料理しなかつたんだな……」

レオが唾然としている中、「うん、そうだね」と厚揚げに食べながら、答えを返した。

「(そういえば、アイドル時代の料理企画で、教えてくれた講師の人が言ってたな……。『料理は技術だけじゃなく、食べてくれる人のことを想うことも必要だ』って。あの時は、そんなこと全く考えてなかつたけど、今の夢美の顔を見ると、ちよつとだけわかる気がしてきた)」

「(毎日、こんなおいしい料理が食べられるのか……。本当にあたしはツイてる。事務所からのサポートで面倒見てもらうなんて、本当ライバーになって良かった)」

各々の想いが渦巻く中、2人の“はじめて”の夜は、静かに過ぎていく……。

## 今夜のレオ飯 ～2人で挑むやり直しの味～

「レオ。あたしに料理を教えてほしい」

夢美が昼食の後にくつろいでいるレオにお願いした。

「良いけど、何かまずかった？」

「レオの作るご飯はいつもおいしいよ。おいしすぎて、いつも食べ過ぎちやうくらいにね。でも、それに甘えるだけじゃなくて、少しでもレオの負担を軽くできたらなって」  
「そう思ってくれてありがとう」

レオは夢美と料理をするのに最適な料理を考えていた。

「なら、〃カレーライス〃を作ろう。前に作ってくれた時のカレーがそこそこ酷かったからね。だから、そのリベンジでカレーライスを作ろうよ。カレーが作れたら、他の料理にも使えるからね。クリームシチューとか、肉じゃがとかにね」

「それ、良いね」

「それじゃ、材料を買いに行こう」

「はい！」

2人はいつものスーパーへ向かい、材料を買い始めた。

「拓哉、男爵イモとメイクインの違いって何？」

夢美が二種類のジャガイモをそれぞれの手に持って、レオに首をかしげながら訪ねた。

「簡単に言うと、男爵イモは丸くて少しごつごつしたモノで、煮崩れしやすいからポテトサラダとかにおすすぬな品種で、メイクインは少し縦長でツルつとしてゐるモノで、煮崩れしにくく煮物とかにおすすぬな品種な」

「へえ。じゃあ、今回はメイクインを覚えばいいんだね」

「そうだね」

メイクインの入った袋をレオの買い物カゴに入れて、買い物物を続行した。

「拓哉、とろけるチーズって冷蔵庫に有った？」

「少しだけなら有るけど？」

「なら、買わなくていいね」

「カレーにかけるの？」

「うん、チーズカレーもおいしいからね」

「それじゃ、俺は何入れようかな……。生卵が良いかな」

材料に加えて、カレーに追加する食材を各々買い込み、帰宅した。

「それじゃ、まずカレーに必要なものは、何でしょう？」

「それはルーかな？」

「違います。答えはご飯」

「あつ、そうか」

「で、ご飯の炊き方というか、炊飯器の使い方は分かる？」

「うん。わからない」

夢美は、少し考えた後、堂々と答えた。

「やっぱりか……。それじゃ、とりあえず、ご飯の炊き方を教えるぞ。簡単だから、すぐわかるよ」

レオが、簡単に炊飯器の使い方と米のとぎ方を説明し、それに沿って夢美が実践していった。

工程が簡単なのか、レオの教え方が良いのかわからないが、夢美は拙いながらも着実に進めていった。

「思ったよりも簡単だね」

「その意気だ。それじゃ、炊飯器のスイッチを入れたから、カレーの調理にかかろう」  
「は〜い！」

ジャガイモや玉ねぎ、ニンジン調理台に出して、ピーラー、包丁やまな板もご丁寧に用意されていた。

「前に夢美が失敗したところだな、ここは」

「あの時は、本当にすみませんでした」

「皮むきはできるみたいだから、さっさと皮をむいてしまおう」

「おっし、やろう！」

2人は、ピーラーや包丁を駆使しつつ、皮をむいていった。

「それじゃ、皮むきが終わったから野菜を切るぞ。まずは基本から。包丁を持たない左手は、猫の手にして、食材を押さえてから切ります。はい、猫の手をして、はい、ニヤーン！」

「ニヤーン！。って、何させてるのよ」

「可愛い……／＼／＼それじゃ、野菜を切っていくんだけど、いきなり材料を切らすのは危険だから、俺が手伝うぞ」

「はーい。って!!」

レオは夢美の背後に回り、優しく夢美のそれぞれの手首と掴み、レオが夢美の腕を動かせるようにした。

「レ、レオ……。ちよつと、これは……。恥ずかしい……」

「だったら、さつさと野菜を切るぞ」

「う、うん……」

「ジャガイモとニンジンのは硬いから、基本的には小さめに切ること。まずは縦に切っていきます」

レオにより、夢美の手が動き、食材に包丁を入れていった。

「包丁は、上から落とすんじゃないなくて、斜めに力を入れるんだよ。刃を滑らせて、切るんだよ。そうすれば、無駄な力を入れずに、すつと切れるから」

「わかった……。やってみる」

その後も拙いながらも、夢美は食材に包丁を入れていき、野菜の下ごしらえは完了した。

「（これ、あたしの両手を掴んでいるってことは、私の背中にはレオがピッタリくっつい



「ているってことだよね……。やだ、恥ずかしい。それに、レオの吐息が耳にかかって……／＼／＼」

「よし、野菜が切れたから、今度はカレーを作っていくぞ」

「うん、わかった」

「それじゃ、鍋に火をかけて、オリーブオイルを少し入れて」

鍋に火をかけ、オリーブオイルを少量鍋に回しいれた

「十分に温まったら、肉を入れる」

「はーい」

鍋にお肉を入れて、鍋で炒めるように火を通していった。

「レオ、煮込んだったら、水を入れてから、煮込んだから火が通るじゃん？」

「それは、こうやって焼かないと、お肉の臭みが抜けなくて、お肉の嫌な臭いが付いちやうからね。カレーの臭いで誤魔化せるけど、変な臭いは無い方が良いだろ？」

「そうだね。今はまだそこまでこだわる必要は無いけど、そういう細かい所に気を配れ

ると、料理はもつとおいしくなるから。そういう事はおいおいやっていこう」

その後、野菜を鍋の中に入れ、ある程度火を通し、水を加えて、野菜に火が通る様に煮込み始めた。

「とりあえず、しばらくは休憩。お疲れ様」

「うわゝ。疲れたゝ」

「それじゃ、飲み物用意するから待ってて」

「ありがとう」

レオが入れた緑茶を夢美にも渡し、お互い今までの苦労をねぎらった。

「それにしてもお疲れ様」

「指を切らないように、緊張しながら野菜を切るのは、本当に疲れたよ……。レオは、いつもあんなことしているの？」

「いつもじゃないけど、時々はするかな。いつもは、ある程度作り置きを作ってから冷凍して、時々使っていくつて所かな。ハンバーグとかは、色々と使いやすいから、結構重

宝しているかな」

「へえ〜」

「勿論、大変だけど、夢美はきちんと食べてくれるから、作り甲斐はあるよ」

「……／＼／＼」

「まあ、作り置きはしているから、手を抜いていい時は抜いているけどね」

レオの優しい笑顔に、夢美は少し頬を赤らめた。

そして、他愛のない話をしていく中で、野菜に火が通る時間となった。

「野菜に火が通ったかは、一番硬いジャガイモに箸を刺して、すつと刺さったら大丈夫。それじゃ、刺してみて」

「……。すつと入った」

「それじゃ、あとはカレールーを入れて、完全に溶けたら完成。ルーの量は、ルーの箱の裏に書いてあるから、それを見て入れような」

火を消してからカレールーを入れて、溶けるようにかき混ぜた。

「しつかり溶けたら、あとは少し煮たら完成だけど、ここで家庭によって、色んな隠し味を入れるんだけど、ここはシンプルに中濃ソースで良いかな。はい、お玉一杯程度で良いから、入れてみて」

お玉に中濃ソースを入れて、その後しつかり混ぜる様に再びかき混ぜた。

「後は、ご飯が炊ければ完成。お疲れ様」

「お疲れ様」

「ちよつと、くすぐりたい……」

レオはカレーを完成させた労をねぎらうために夢美の頭を優しく撫で、どこかまんざらでもないでもない夢美であった。

「それじゃ、盛り付けるぞ」

「とけるチーズを入れて、チーズカレーにしよう」

「俺は、普通に食べようかな」

2人はそれぞれのカレーを盛り付けて、鼻腔をくすぐるカレーの匂いにしばしば我慢しながら、食卓に着いた。

今夜のレオ飯：「夢美と作ったカレーライス」

「それじゃ、手を合わせて」

「はい」

「いただきます」

「おいしいー！」

「本当にカレーは万能だな。いつ食べてもおいしい」

「これが、私が作ったカレー……。いつもよりおいしい」

「だろ？。これが自分で作った苦勞の味だよ」

「うん。緊張しちやって、ちよつと疲れたから、本当においしい！」

2人は、2人で作ったカレーに舌鼓を打った。

「カレーのトッピングは、カツカレーとかぐらいしかしないから、チーズカレーって、そこまで食べた思い出が無いんだよね」

「ん？。おいしいよ、チーズが辛さを包むからそんなに辛くならないからね」

レオの目の前に、夢美がスプーンですくったチーズ入りカレーが突き出された。

「はい、あ〜ん」

「ちよ、夢美……／＼。恥ずかしい」

「さつき、私の頭思い切り撫でたお返しだ」

「それなら、仕方ないな。はい、あ〜ん」

照れながらも夢美のカレーを食べ、「おいしい」と笑顔で返した。

「おいしいでしょ。生卵とか、色々トッピングできるのが、本当においしいよね」

「また、ネットで色んな食べ方見てみようかな」

「そんな時は、レオのカレーでよろしくね」

「わかったよ。本格的なカレーを作るよ」

「やったー!!」

そのまま、2人はカレーを食べ進め、気が付けばお互いの皿は空になっていた。

「「ごちそうさまでした」」

「じゃ、洗い物してくね」

「お願いするね」

2人の皿を流しに持っていき、慣れた手つきで洗い物を始めた。

「(なんか良いな、この雰囲気……)」

洗い物をする夢美の姿を見ているからか、夢美と作ったカレーで満腹になったのか、レオは少し意識が薄らいでいて、理性が少し緩んでいった。

「洗い物だけだけど、家事にも慣れてきたね、あたし。本当にレオに感謝しないとね」  
「夢美〜」

「!?。レ、レオ！」

「ふふふ、夢美は偉い子だよ」

突然、レオは夢美を後ろから優しく左腕で抱きしめて、右手であやす様に頭を優しく撫でた。

「ちよ、ちよつとレオ……。どうしたの!？」

「いや、別に。夢美はいつも頑張っていて、偉いなくて。だから、しっかり褒めない  
とね〜」

「くすぐりたいよ……」

「ふふつ、夢美は偉いよ。料理を頑張りたいって言うてくれるなんて、本当に夢美が頑張ってるよ」



夢美は身じろぎながらも、レオの優しさを少しづつ受け入れてきた。そして、しばらくしたら夢美はレオに優しく抱きしめられた。

「夢美く。あつたかい……」

「レオも暖かいよ……」

「ふふっ……」

レオの意識が元に戻るまで、お互いの温もりを優しく感じあっていた。

「ねえく、夢美？」

「何、レオ？」

「今日はちよつと寒いから、もうちよつとこのままにさせて」

「仕方ないわね。それじゃ、明日のご飯はとびきり豪華にしてよ」

「んく。わかった」

その後、立っているのが辛くなったレオは、夢美を抱きしめたままレオのベッドに腰

かけて、頭を優しく撫でたり、耳元でやさしく囁いたりとレオの一方的な愛を夢美は受け続けていた。

その後、意識が元に戻ったレオが自分のしでかしたことに驚き、夢美に綺麗な土下座を決めたというのは、2人だけの秘密としてお互いの胸の中になってしまうことにした。

なお、意識が元に戻ったのは、翌日の朝であり、レオのベッドで一夜を過ごした2人の顔は、穏やかで幼子のものであったことをここに記す。

## リワード フォー ユー

「ただいま。あゝ、疲れた〜」

「お帰り、レオ。ご飯できてるよ。また、カレーだけど……」

「全然いいって。夢美の作るカレーは美味しいから」

年の暮れが近づくある日、とある企業案件でスタジオでの収録を終えたレオは、夢美が待っている自宅へ帰ってきた。

夢美との結婚を目指し、誰もが納得する立ち位置を得るために、精力的に案件を受け続けたのもあるが、この頃になると、レオを含めたにじライブ三期生の3人は、それぞれの得意分野で企業案件を受けることが多くなり、食事は夢美が作ることもしばしばあった。

ただし、夢美の料理の腕はレオや静香等の指導により、上達しているものの、作るのはレオに教えてもらったカレーやシチューといった煮込み料理が中心であった。

「それじゃ、座って待ってて〜」

「は〜い」

レオの分と自分の分のカレーを夢美が用意して、食事の時間となった。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

その後、食事を終えた夢美は、案件で疲れたレオを労っていた。

「今日もお疲れ様」

「本当だよ。最近案件続きだったからな。案件が有るのは嬉しい限りだけどね」

「そうだね。あたしもレオ程じゃないけど、私を指名してくれる企業案件が始めて、嬉しい限りだよ。たまにビックリ系やリアクションを要求される案件が有るのはちよつと気になるけど」

「でも、先月歌の案件もあったじゃん」

「それはそうだけど……」

しよげている夢美をハハツと笑いながら、優しく頭を撫でた。

「ん、でさ……。最近、案件で結構忙しかったじゃん？」

「うん、そうだね。それで、夢美には迷惑かけてると思ってる」

「しつかりとした企業案件だから、私も何も言うことは無いんだけどね。最近、案件とか配信とか、裏でも色々頑張ってるからさ……」

夢美の声は、次第に真剣な声になっていた。

「ん、夏に私への気持ち伝えてくれたけど、きちんと周囲に納得してもらえないまで  
“って言って、幼馴染のまま置いてほしいって言ったじゃない”

「うん、そうだな」

「でもさ……。最近、頑張っているからね。本当に頑張ってるからね」

夢美は溜めに溜めて、やっと言葉を吐き出した。

「ご褒美にさ……。明日まで、そう明日まで……。『恋人』になっても良いかなあ〜って」

夢美は真つ赤になりながらも笑顔で一日限りの関係を承諾した。

「はえ？」

「いや、だつてさ、レオが毎日頑張つて、ダンスレッスンしたりボイスレッスンしてる時でも、私のご飯とか作ってくれたり、私の部屋の掃除とか手伝ってくれたりしてさ。レオがメチャクチャ頑張ってるから、何かお礼というか、ご褒美をあげないとさうって思つたんだよね」

「……………」

「今日は帰りが遅くなるからつて、あたしのご飯作つたけど、まだカレーとかしか作れないし、前とかはレトルトだったり冷凍食品だったりしたし、まだまだもなご飯は作れないから。未だにレオに頼りつきりだし……。っ!？」

お礼の言葉を緊張のあまり早口になっていたところに、レオは横に回り込んで、夢美を優しく抱きしめた。

「ありがとう、夢美」

「う、うん……。で、でも、『恋人』っていう事だけど、まだ『そういう事』はしないからね。そういうのは、まだ早いし、無理矢理ってのも嫌だからね」

「わかった。夢美の嫌がることはしないよ」

「だからって、ちよつとは良いよ。だって…。『恋人』なんだからね」  
「うん、わかった……」

レオは、抱きしめる強さをちよつとだけ強めた。

夢美は、レオの温もりにそつと身を寄せ、優しく抱きしめ返した。

「夢美……」

「……………」

しばらく抱きしめあつた後、二人は明日の予定を立てることにした。

「明日のデートは、お互いの服を買いに行こうよ。ちよつと、遠目のショッピングモールとかでね」

「いいね。たまには、遠出するのも悪くないな」

「あと、ここだったら観覧車が有るから、買い物が終わったら、一緒に乗ろうよ。こういうリア充イベントつてのも、ちよつとはね」

「デートの最後に観覧車か……」

ちよつと遠くのショッピングモールでのデートの予定を立て終えた2人は、それぞれの部屋でそれぞれの夜を過ごすのであった。

ただお互いに、次に顔を合わせた時、時間制限付きではあるが、いつもと違う関係であることに覚悟と期待が混ざり合った不思議な雰囲気醸し出していた。

(次の日……)

「(夢美、起きているかな?。さっきアプリで既読が付いていたから、起きているとは思うんだけど……)」

身支度を整えたレオは、夢美を迎えに行くために、隣の部屋の入り口でチャイムを押した。



「……………ッ!？」

「ご、ごめん。待った!？」

その後、おずおずと出てきた夢美は、化粧も薄いながらもしつかりとされていて、服もいつもの夢美とは考えられない程の気合の入ったものであった。

「ちよつと、準備に手間取って……………」

「いいよ、そんなに待ってないから。でもちよつと、待ち遠しかった」

「うっ……………。ありがとう……………」

「それじゃ……………。行こうか」

「う、うん……………」

差し出されたレオの手をそつと握り、2人は目的地のシヨツピングモールへと向かった。

どこか慣れないのか、2人の間にはちよつと緊張した空気が流れ、電車の中では時々お互いが無言になっていた。

目的地のショッピングモールに到着した2人は、それぞれの服見繕い始めた。

「うーん、レオには黄色とかブラウンとかの色が良いよな……」

「夢美はいつもピンクだったり、清楚な服が多いから、たまには路線の違った服を着させたいな……」

レオには黄色のラインが入ったパーカー等を数種、夢美には薔薇の刺繍がワンポイントに入った薄手のセーター等を数種購入した。

この頃には、お互いの緊張が解けて、いつもの2人の雰囲気に戻っていて、柔らかな雰囲気に戻っていった。

「ハッハハ！。いや、もう。本当にすごい昔話だよね」

「笑うなよ、由美子……。結構傷ついているんだけど……」

「ごめんごめん」

レストラン街で、半個室のレストランで夕食を食べながら、談笑を続けていた。

「よし、次に料理を教えるのは、ハンバーグにしようかな。材料を混ぜて、焼くだけだし、餃子とかミートボールとかの応用に使えるからな」

「おーし、頑張るぞ」

「俺も頑張つて、教えるぞ」

「わーい！」

食事を終えた2人は、最後の目的地である観覧車へと歩を進めた。

2人は腕を組んで並んで歩いていたが、その手のひらは冬にも関わらず、緊張のために手汗がうっすらと浮かんでいた。

「なんか、いつも二人つきりなのに、なんか緊張するね」

「ああ、そうだな」

「『恋人』と一緒に観覧車に乗るなんて、ライブを始める前には考えられなかった」

「俺も、最初は大きなステージ歌を歌いたいって思ったから、ライブを始めたのに、今ではこうやって『恋人』とデートできる」

2人は、上昇し続けている観覧車の中で、隣同士で座り、優しく微笑みあった。

今は仮初の恋人であつても、二人の絆はもう既に恋人以上とも言える深い絆で結ばれていた。

「夢美、あの時の言葉をもう一度言うぞ」

「うん」

「俺は諦めない！。夢も夢美も由美子も、全部だ！。案件が少ない？。ならバンバン取ってきてやるよ！。メジャーデビューだつてすぐにしてやる！。夢美、当然お前もだ！。周りの迷惑なんて気にならないほどの利益を出してやればいいんだよ！。傲慢な考えかもしれない。強欲な考えかもしれない。それでも俺は全部手に入れる覚悟を決めたんだ！」

レオは、あの時のベランダでの誓いの言葉を、再び告げた。

「うん、わかった。じゃ、私もあの時の言葉を言うよ」

「ああ」

「まだ時期じゃないってだけの話だよ。一年くらい経てば公式の仕事ももっと増えてあたし達も安定すると思う。だからさ、まだ幼馴染でいてよ、拓哉」

夢美は、あの時の条件付きの了承の言葉を、再び告げた。

「わかってる。だから、案件を着実にこなしてる。チャンネル登録数も着実に増やしていて、周囲に夢美との関係を認知してもらいつつあって、にじライブの企画でも、夢美とセットで呼んでもらったりしている」

「うん。感覚的だけど、もう目の前になってると思う。だから、レオの願いはもうすぐ叶うと思う。だから、今日はちよつとだけ、レオの想いに報いようと思ったんだよね」

「ありがとう、夢美」

上昇し始めていた観覧車もそろそろ頂上へと向かいつつあった……。

「でね、レオ。こうやって、買い物行ったり食事に行ったりって、いつもしてたりするじゃない?」

「ああそうだな」

「それって、あたしたちの日常じゃない？。でも、それじゃ、『恋人』っていう事って感じはしないよね……。だからね、これもご褒美。どう取るかは、レオが選んで……」

夢美は、レオの方を向き、静かに目を閉じた。

これが、何を指し示すか、わからないレオではなかった。

「夢美……」

頂上へとたどり着いた観覧車の中で、二つの影が静かに重なった……。その後、2人の間には静寂が包み、二人きりの時間は終わりとなった。

「夢美、最高のご褒美ありがとう」

「ど、どういたしまして……／＼／＼」

その後、レオの部屋に戻った2人は、言葉もなく優しく抱きしめあった……。

この温もりを忘れないように……。

再び、この温もりを味わうと心に誓いながら……。

## アディショナルタイム

『恋人』同士としての観覧車デートが終わり、優しい抱きしめあつた後、部屋着に着替えなおした二人は、身を寄せ合いながら、ミルクココアを一緒に飲んでいた。

「今日は、楽しかったよ」

「そう思ってくれたら、計画した甲斐があるよ」

「ありがとう」

「恋人になれば、こういうデートは何回もできるようになるよ」

レオは優しく夢美の頭を優しく撫で、それをくすぐつたいと感じながらも、夢美は受け入れていた。

「とはいっても、ちゃんと『恋人』になっても、あたし達の生活ってあんまり変わらなさそうだよね」

「ん？ そうか？ こういう触れ合いが増えるから、変わるんじゃないのか？」

「でも、今でもご飯作ってもらっているし、ほとんど養ってもらっているからね」

「ご飯の一人分も二人分も変わらないからね。きちんと食費は貰っているからね。それに、こうやって一人の食事って、寂しいからね」

「それもそうね」

お互い心安らかな時間を過ごし、そろそろお互い眠る時間となっていた。

「ふあく…………。もうそろそろ寝るか…………。明日も配信だから、準備しないとイケないかな…………。あつ…………」

「な、何？ いきなり」

レオは、夢美の言葉をふと思いついて、何かに気が付いた。

「な、なあ、夢美？」

「何よ、いきなり」

「この関係は、『明日まで』って言ったけど、どこまでって決めてないよな」

「そうだったけ？」



「だからさ。今日の夜は、まだ『恋人』同士だよな」

「うん、そうだね」

「じゃ、じゃあさ……。『一緒に寝ない?』」

「!？」

「ごめん、欲張った。忘れて」

レオの欲張った願いを出したが、すぐ撤回した。

「レ、レオ……」

「ごめん、ちよつと下心が漏れた。本当にごめん」

「ん。ちよつと恥ずかしいかな……」

「そうだよな。本当にごめん」

「でも、レオの理屈も間違っていないから……。わかった……。良いよ、一緒に寝ても

いいよ」

「はえ?」

夢美からの答えは、「了承」であった。

「だから、良いよ」

「ほ、本当に？」

「うん。でも、昨日言った通り、〃そういう事〃はダメだからね」

「わかった。可能な限り頑張ってみる」

「可能な限りじゃダメ。絶対ダメ。そうじゃないと、今後一緒に寝てあげないから」

「わ、わかった」

「それじゃ、戸締りしてくるから、先に布団に入つてて」

レオは、布団に入り夢美が入るためのスペースを確保していった。

数分後、戸締りを終えた夢美が再びレオの部屋に戻ってきた。

「それじゃ、入るね……」

「うん……」

「お、お邪魔します〜」

お互いの声がどこか緊張していった。

一人用のベッドに入るために、二人は優しく抱きしめあい、夢美はレオの腕の中にすっぽり収まっていた。

「やっぱり、布団は冷たいね」

「そうだな。そのうち温かくなるよ」

「そうだね。でも、レオが温かいから。ちよつとましかな」

「俺もだよ」

「でも、ちよつとなんかむずかゆい。はじめてだから」

「俺もちよつと恥ずかしい。でも、あたたかい」

「うん、私もあたたかい」

2人はお互いの温もりを分け合いながら、睦みあっていた。

「フフツ……。温かい……」

「俺も温かい……」

「心地いいのに、ドキドキする」

「俺も断れると思って、言ったのに。言ってみるもんだな」

「まあ、そこはレオだからって所もあるかな。信頼しているからね」  
「うん、わかった」

「まだ寒いから、もうちよつとくつつくね」

更なる温かさを求め、2人はほぼ密着した状態までくつついていた。

「(夢美のゆったりとした息遣い……。シャンプーのいい匂い……)」

「(レオの匂いと温もり……)」

「(このままだと、頭がおかしくなる……)」

電気が落ちた部屋で視覚が働かない2人は、お互いの嗅覚と触覚、聴覚によりお互いの存在を確かめ合っていた。

特に嗅覚からの刺激が強く、お互いの匂いで強烈な多幸感の中、2人とも頭の中がドロドロになりつつあり、思考能力が鈍り始めてきた。

「今日は抱きしめられることが多かったけど、今の方がレオを強く感じる……。見えな  
いのになそこにいるって強く感じられる」

「俺もこの手の中にある温もりが、夢美だつて見えないのに、それが夢美だつてわかる」  
「うん……。もう、そろそろ寝ようか……」

「そうだな……。それじゃ……」

「ん？」

レオは、身体を少しずらし、そのまま優しく夢美の頬に唇を落とす、元通りの体勢に戻った。

「な、何するの？」

「何って、おやすみなさいのキス」

「なるほどね。ちよつと驚いた」

「ごめん、ごめん」

「許さない」

「そんな」

「許してほしかったら、今夜はこのまま優しくして」

「わかった」

「それじゃ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみなさい」

バラレオの2人は、緊張した気持ちと穏やかな気持ちの狭間に揺れながらも、夢の世界へと落ちていった。

その後、2人は何事もなく、穏やかな目覚めをした後は、今まで通りの「幼馴染」としての関係に戻ったが、1日だけの魔法は今後も2人の心のどこかに残り続けるのであった。

〈今夜のレオ飯特別編：義姉妹のお料理教室〉

「まさか、由美ちゃんから連絡が来たと思ったら、料理を教えてほしいって聞いて、驚いちゃった」

「ありがとうございます、先輩」

「いやいや、構わないよ。教えるって言っても、そんなに難しい料理教えるつもりも無いからね。拓哉から、惚気話と一緒に由美ちゃんの作れる料理は聞いてるからね」

静香の自宅のキッチンで、夢美と静香の楽しいお料理教室が始まっていた。

「由美ちゃんが、料理を教えてほしいなんて、愚弟が羨ましいね。こんなに良い女捕まえたんだから、その責任取ってもらわないとね」

「先輩、レオとは『幼馴染』ですから。料理もいつも作ってもらってるから、少しはお礼をしないとダメって思っただけですよ」

「ふくん」

夢美の慌てた答弁に、訝しい目線を向ける静香であった。

「まあ、でも、ゆくゆくは私の義妹になってくれるんだから、お姉さん頑張るわよ！」

「まだ、そんなんじゃないですよ」

「ふくん。『まだ』なんだ。それじゃ、期待しちやおうかな」

「あつ……」

夢美の心の中で、「この人には勝てないな」と思いながらも、料理教室へと話を進めた。その後、2人で作ったハンバーグと少し甘めに仕上げたニンジンのグラッセ等の添え物をタッパーに入れて持ち帰り、今夜の夕飯に出されることとなった。

本日のレオ飯：「義姉妹で作ったハンバーグ」



## ヤドリギとパイとチョコレート

「あゝ。どうしようかな」

時は2月前半……。

きたるべきバレンタインデーに備えて、一人配信をする場所で一人の女性――茨木 夢美／中居 由美子――は、頭を抱えていた。

いつもの夢美なら、百貨店や大型スーパー等で発売されている既製品の高いチョコレートを購入して渡すという行動をするのだけど、今年の彼女は、そういう選択肢を取ることができない状況に追い込まれていた。

「はあ……。なんで、この前の風紀委員会で、私だけ罰ゲームになっちゃったのかな……。」

夢美は、先月の風紀委員会で「メジャーデビューして、アイドル活動をしているにもかかわらず、ゲーム配信で汚い言葉を叫んでしまった」罪として、「愛しの彼に手作り

「チョコレートをプレゼント」の刑に処せられてしまったため、先輩からの命令でもあるため、断るに断れないのであった。

「確かに、叫んじやったのはわかるけど、このタイミングでなんでなんだよ……。しかも、なんだよ。『愛しの彼に』って……。仕組んだの、絶対林檎じゃん……。あの厄介カプ厨めく。ああ。嘆いても仕方ない。カグヤ先輩やまひる先輩からの命令なら逃げられないから、作るか……。とりあえず、作り方を探さないと……」

レオとの血のにじむような特訓で、「レシピはしっかりと確認すること」を徹底的に教え込まれた夢美は、ネットで作り方の詳細な方法を探すことに、まずは着手した。

「ふうん……。融かして、型に入れて終わりなんだけど、色々難しいよな……。型を買ってくるのも、面倒だし……。クッキーで出来た器にチョコを流し込むってのも、有りだよな……。うん……。今までの経験から、そこまで凝ったものは、きつとできないんだよな……。何々、クッキーとかパイに溶かしたチョコを付けて、そのまま冷やすつてもあるのか。それなら、型とかいらぬし、融かして、ちよつと付けるだけで良いな。よし、これで行こう！」

両案を見つけた夢美は、財布を取り出し、いつも利用しているスーパーへと足を運んだ。

「最近、ポテチにチョコを付けたお菓子もあるよね。あまじよっぱいのが癖になるけど、今回はシンプルにいこう。ん、これは……」

お菓子コーナーにあるクッキーの棚にで色々と見ていると、一つの商品に目が付いた。

その商品は、昔からずっと販売されていて、夢美も食べたことがある商品で、ハート型のパイであった。

「なるほど、これなら良いね。バレンタインなら、これで映えるでしょ。チョコは、この時期に売ってる融かして固める用のお徳用チョコレートで良いか」

目当ての商品と、愛飲しているエナジードリンク等を購入して、自室へと戻り、財布などを置いた後、すぐさま隣のレオの部屋に入ってしまった。

「さて、事務所で打ち合わせ中のレオが帰ってくる前に作っちゃおう。まずは、チョコレートを融かさないと……。最初は、お湯を沸かして……。えつと……。包丁で細かく砕くんだけど……。難しいな……」

チョコレートの塊に恐る恐る包丁を入れて、粗みじんではあるが、細かく砕いていき、ボウルの底を埋めていった。

「次は、えつと……。湯煎だっけな……」

そして、湧いたお湯にチョコの入ったボウルを入れてお湯の熱でゆっくりとチョコレートを融かしていった。

「おお……。とけるとける。きちんと混ぜ合わせて、後は付けるだけつと……」

完全に融かしきったチョコレートをパイを沈めて、手早く、クッキングシートの敷いたお皿に載せた。

パイにチョコレートとを全部つけ終えて、残りのチョコは、スプーンですくって食べ終えたりして、片付けを終えた。

「証拠写真を撮ってから、ラップにかけて、その上にフリーペーパーをかけてつと……。タッパーとかで隠しておけば、大丈夫でしょ。あ、慣れないこととして、疲れた……。寝よ……」

自室に戻り、ベッドでひと眠りついた。

時を同じくして、入れ替わる様に、打ち合わせを終え、スーパーで夕ご飯の買い物をしてきたレオが帰宅してきた。もう一つの手には、事務所で貰ったであろうチョコレートに入った紙袋が握られていた。

「ん、あれ、乾かし台に洗い終えた食器がある。夢美が使ったのかな？ ボウルとか鍋とか、何に使ったんだ……」

小さな疑問を残しながら、レオは冷蔵庫を開けて、買ってきたものを冷蔵庫に入れようとした。

「ん？　なんか変だな……。タツパーの位置が変わってる。いくら夢美でもタツパーに入れている常備菜を昼飯として食べたとしても、ここまで散らかることは無いだろうし……。それに、常備菜の量も減ってないから……。それに、このフリーペーパーは……。いかに、何か隠してます”って言ってるもんじゃん……。!?」

冷蔵庫内のフリーペーパーを捲り、隠しているチョコレートパイをレオは見つけ出した。洗い終えた食器と見つけ出したチョコレートパイから、夢美が作ったものだという結論に至るのは、そこまで難しくはなかった。

「……。なんだよ、夢美……。あの風紀委員会の罰ゲームはしつかりしたんだな。エライ子だな。さて、夕食を作るとしますかね」

約2時間後に目を覚ました夢美と、夕ご飯の調理を終えたレオは、いつもの様に一緒に食事を取り始めた。

「いただきます」

「今日もおいしい食事ありがとう」

「良いってことよ」

バラレオは、今日の夕飯に舌鼓を打ち、2人での食事を楽しんでいった。

「あれ、レオ？ その紙袋は、何？」

「ん、これはバレンタインのチョコレート。今日、会社の人達から貰ったんだよ」

「ふうん。そういえば、事務所に袁×たちからのチョコレート来たんでしょ？」

「うん。箱一杯のチョコは何度見ても壮観だった。でも、そういうのって、申し訳ないけ

ど、事務所の人達に処分を任せたよ。メチャクチャ嬉しいんだけど、色々有るからね」

「もつたいないけど、色々有ったって言うてたもんね」

「そうそう」

食事を終えた2人は、いつもの様にまったりしていった。

「食後のお茶もおいしい」

「はは、淹れた甲斐があるよ」

2人は、他愛もない話を続け、暫しまったりとした空気を味わっていた。

「んでき、今日はバレンタインってことじゃん？」

「ん、そうだけど？」

「それに、私が風紀委員会の罰ゲームを指示されたって知っているよね」

夢美は唐突に話題を切り出した。

その顔は、緊張でちよつと紅に染まっていた。

「そうだけど？」

「私、作ったんだ……」

「何を？」

「わ、わかるでしょ！ チョ、チョコレート！」

「は、はえ？」

全てを理解していたレオは、演技で驚いた表情を見せた。



「本当は百貨店とかのお高いチョコの方が喜んでくれると思ったんだけど、風紀委員会とかの罰ゲームも有るからさ。初めて、一人で頑張ってみた。お菓子にチョコを付けただけなんだけどさ。生チョコとかいきなり難しいし……。!?」

おずおずと話し続けている夢美の頭をを、レオは優しく撫でた。

「ありがとう。その気持ちだけで、お腹一杯だよ」

「うん……」

「例え、どんな高級なチョコよりも、夢美から貰ったチョコの方が嬉しい」

「ありがとう……」

2人は優しく笑いあい、二人だけの空間を存分に味わっていた。

「じゃ、チョコレート持ってくるね」

ちよつと名残惜しそうに離れた夢美は、冷蔵庫から自分のチョコレートを取り出し

た。

「はい、どうぞ」

「じゃ、いただきます」

レオは、パイの一つを取り出し、口に運んだ。  
ゆつくりと咀嚼して、その味と込められた気持ちを丹念に味わった。

「おいしい。メチャクチャおいしい」

「ま、まあ、チョコを融かして、パイに絡めただけだからね」

「それだけじゃないよ。今日貰ったチョコにはない気持ちがかもっているから」

「ふふ。でしょ?」

誇らしげに胸を張る夢美をみて、レオは優しく微笑んだ。

「じゃ、次は食べさせてほしい」

「えっ」

「ほら、あ〜んして」

「う、うん……。あ、あ〜ん……」

ハート型のチョコレートパイを一つ手に取り、レオの顔の前に差し出し、それをレオはそのまま口に含んだ。

「うん、おいしい」

その後、レオも夢美に食べさせたりして、全てのチョコレートパイを食べ終えた。

「まださ、料理とか全然上手じゃないから、あんまりおいしいご飯作れないけど、きちんと付き合うことになったら、もうちよつと頑張るから、待つてよ」

「わかった。しっかりと教えるし、夢美が納得できるくらいまで有名になって、みんなを納得させてみせるよ。ん？」

ふと、夢美の口元に融けきっていないチョコレートが付いていることに、気が付いた。

「ん、レオ、どうした？」

「いや、大したことじゃないよ」

「ふうん……」

「口元にチョコがついてるよ」

「へ!?! どこ!?!」

「ここ」

「へ!?!」

チョコが付いていることを指摘して、夢美が口を拭おうとする前に、レオが顔を近づけて、キスと共にすぐさま優しく舐め取った。

「も〜!」

「怒った顔も可愛いし、チョコもおいしかったよ」

「いきなりは、怒るよ!」

「夢美になら、怒られても良いかな」

「李徴、いい加減にしろよ」

「ハハハ」

突然のレオの行動に怒った夢美だったが、その表情は満更でもなかったみたいだった。

「今年は『幼馴染』として迎えるバレンタインだけどき、来年は『恋人』としてのバレンタインを迎えたいかな」

「私も『茨木 夢美』として、もつと案件を取って、レオにも負けられないように頑張ります」  
「そうだな」

幼馴染以上恋人未満のバラレオのバレンタインの夜は、この後も静かに、でも少し情熱的に過ぎていくのであった。

なお、この後、このバレンタインのことは、まひるやバンチョー経由でしっかり妖精たちに暴露されて、林檎たちカプ厨は、てえてえで胸を抑え、ツイッターのトレンドに乗ったりと、祝福とてえてえへの感謝の声で埋め尽くされたのであった。

## The Last Day of……

「ふわあ……。よく寝た……」

夢美は、いつもの通りの朝が来て、いつも通りの目覚めをしていた。

しかし、その部屋の光景はいつも通りではなかった……。

空き缶等が散らかっているいつもの部屋ではなく、一人分にしては少し大きいベッドが置いてある小綺麗な部屋であった。

「流石、高級品だわ。今までのベッドとは、寝心地が段違いだわ。新生活の為に、ちよつと奮発して良かった」

ベッドの柔らかさに感謝しながら、ベッドから抜け出す様に起きた夢美は、ちよつと遅めの朝食を食べ始めた。

大きいテレビで情報番組で、最新のニュースを見ながら、穏やかな朝食を食べ、食後には、備え付けの食器洗い乾燥機に使用した食器を入れ、起動のスイッチを押した。

「えっと……。昼から書類を出しに行つて、夜は事務所のスタジオで3D配信か……。久しぶりの配信だけど……。緊張するな……。何度もしていたのに、今日は本当に特別……」

夢美は、スマートフォンにのカレンダーアプリで、自分の予定を確認していた。

「はあく。今日で最後か……。今日まで色んな事が有った……。ここに引越して、新生活が始まって、慣れないことに四苦八苦して、でも楽しい生活……。自分がライブであることを忘れてしまうほどに……」

食後の余韻を楽しみながら、今までのことを振り返っていた。

「さて、行こうか。昨日、さんざん覚悟したはずだよ。今日で終わりだつて」

身支度を整えて、部屋のまだ綺麗な鍵を取り出し、目的地へと向かうために、玄関へと向かった。

「書類は大丈夫。じゃ、〴〵ってきます」

その部屋には、夢美しかいないのに、あまり言わない〴〵ってきます〴〵の言葉を発していた。

それは、新たな自分を見送る〴〵もう一人の私〴〵への言葉なのかもしれない。

「お疲れ、拓哉」

「おう。書類は持ってきたか？」

「うん、大丈夫。出る時にきちんと確認したから」

打ち合わせを終えたレオとの待ち合わせて、鞆の中に入れてある書類を取り出して見せた。

「それじゃ、行こうか。書類を提出しに」

「そ、そうだね」



その後、二人はとある場所へ向かい、その窓口へと向かった。

「よし、それじゃ、出しに行こうか」

「ちよ、ちよ、ちよつと待って!!! 気持ちを落ち着かせてるから」

「後は書類を出すだけだからな」

「でも、私にとつては、一大事なの!」

「わかったから、ちよつと飲み物買つてこようか?」

「いや、いらぬ。もうちよつとだから」

胸に手を当てて、ゆっくりと息を整えた。

「もう、大丈夫?」

「うん。昨日、きちんと覚悟したのにね」

「そうだな」

「これで、二度目なのにね。でも、大丈夫。行くよ」

その後、窓口で書類を提出し終わると、その後、配信をするために、事務所へと向かった。

事務所では、今日の配信の為に多くのスタッフが準備をしていた。その中を、二人は挨拶回りをして、最後にスタジオの中央で指示を出している諸星さんの所へと向かった。

レオと夢美を見つけた諸星は、二人に駆け寄り、壁際で何やら少しひそひそと話し始めた。

「おつ、来たな。ご兩人！」

「お疲れ様です、バンチョー、いや、諸星さん」

「お疲れ様です。今日は、スタジオでの配信を用意してもらって、ありがとうございます」

「かまへんよ。なんせ、『重大発表』ってことで梓を取って、大々的に宣伝をしたから、注目度ウナギのぼりや」

「ネット上でも、いろんな噂が飛び交ってますもんね」

「せやな。社内でも緘口令を出し、三期生が全員揃って3D配信をする以外の情報は私とかつちゃんとかマネージャーぐらいしか言ってないしな。でも、何かを嗅ぎつけたか、*“伝説”*のにじライブ三期生の3D配信の風景を見たいって、多くのライブが来てるな。スタッフ達の邪魔にならないようにとは釘を刺したんだけどね」

諸星が軽く親指でスタッジオの端を指すと、そこには二人の後輩であるライブが複数人、スタッジオ配信の見学をしていた。

「ほう……。3Dお披露目配信するライブもちらほら……」

「何回もした3D配信なのに、今日は本当に緊張します」

「そうか。それにご両人。書類は出したんか？」

「はい。ここに来る前に」

「そうかいな。それじゃ、今日の配信は盛大にしなくちゃな」

諸星は、自然と笑みを浮かべ、自分に気合を入れた。

「ありがとうございます」

「後輩の晴れ舞台や。しっかりしないと、にじライブの第1期生としての名が廃るやろ？ それに、ウチができるのは舞台を作るだけや。その舞台で踊るのは、二人やでな」

スタジオの設営に戻った諸星の背中に深々と頭を下げる二人であった。

「おはっぼ。お疲れ」

「今回は遅刻しなかったな、林檎」

続いて、今回の主役の一人である林檎が二人に声をかけてきた。

「ちよつと酷くない。うわくん、夢美。レオが虐めるよ」

「いや、遅刻については、擁護できない」

「酷い」

「それにしても、良く間に合ったね。世界中をまたにかけるピアニストなのに」

「いや。私レベルになっちゃうと、世界中から引つ張りだこなんだけどさ。そんなオフアーよりも、この配信の方が大事に決まってるじゃん。だってs……」

「林檎、ここから先は、ダメだ」

思わず何かを漏らそうとする林檎をレオは諫めた。

「あつ、ゴメン。よし、それじゃ頑張りますか」

軽く伸びをした林檎は、自分の指定された席に座った。

その後、マネージャーたちとの詰めめの打ち合わせを終えて、配信開始の時間となった……。

(配信準備をしています……)

「重大発表って何だろうな……」

「3期生が全員揃うっていうから、ライブの告知かな？」

「でも、レオが武道館ライブしたばかりだぞ？」

「おっし、それじゃ、ここからが本番やぞ。ここから先は、お笑いは一切なしや。レオと夢美の行動が全てやぞ」

「はい！」

バンチョーの声に、みんなの気を引き締めて、3人は真剣な表情になった。

「配信入ります。3。2。1。始めます！」

三脚の椅子と、一卓の机が用意され、椅子には三期生が座り、机の後ろには、諸星くと竹取かぐやが立ち、配信のスタンバイに入った。

スタッフの緊張混じりの声で、配信が再び始まった。

(配信が始まります)

「きちちゃあ〜」

「待ってた」

配信画面には、金屏風をあしらえたどこかのホテルの会見会場を思わせる背景と席の前に立つ三期生と、司会者の場所にかくやが立っていた。

音声は、シャッター音が所々聞こえており、どこぞの記者会見のようであった。

「記者会見www」

「誰がここまで完璧にしるとwww」

「三期生とバンチョーとか豪華だなwww」

「さっきの茶番とは打って変わって、完全にマジモード」

「はいはい、みなさんこんばんちョー！ 司会の竹取かぐやです。これから、前々よりみんなに案内していた重大発表の時間や。みんな、良く聞いときや！」

「みなさん、おはつぽー、白雪林檎です！」

「みなさん、こんばん山月！ 獅子島レオです！」

「こんゆみー！ 茨木夢美です！」

「今回は、重大発表ということで、みなさんにはこの配信にお集まりいただきありがとうございます。今回は、三期生というよりも、ほとんど私と夢美に関係することになります。」

「ざわ…… ざわ……」

「(；。D) ゴクリ……」

「これは、マジモード……」

「レオとバラギの個人のこと……?」

「にじライブ、卒業?」

「バラギの結婚に、花京院の魂を賭けるぜ！」

「花京院www」



夢美と林檎が席に座り、ただ一人立ったまままで話し始めた真剣なレオの態度に、視聴者も緊張した雰囲気になっていた。

「今回、皆さんにお伝えしたいのは、私、獅子島レオは、この度以前よりお付き合いをさせていただいている同期ライバーの茨木夢美さんと入籍をいたしました」

レオが真剣な言葉を告げると、配信ではカメラのシャッター音が連続で鳴らされて、更に記者会見の雰囲気をも更に増していた。

「!？」

「マジか!!」

「ついいにか!」

「V同士の結婚とか初だぞ!」

「ええ!」

「ガチの入籍会見じゃん」

配信画面のチャット欄では、レオの発表に驚きと戸惑いが現れていた。

「『企業に所属するライバー同士の入籍』という業界初のこと、混乱されているのは重々承知です。ですが、私にじライブ所属のライバーとして活動していく中で、『茨木夢美』と言う女性が今現在の『獅子島レオ』という一人のライバーが、夢を取り戻し、その夢を叶えるまでに至るために必要不可欠な存在であり、彼女の存在が日を追うごとに大きくなっている自分がいて、そんな彼女を幸せにしたいという思いで、『婚約』という一つの明確な形として、自分の覚悟を形として表したかった次第です」

レオの真剣な姿は、周囲を圧倒するような強い意志を秘めていた。

「それでも、こうやって発表するって、スゲーわ」

「流石、男性企業Vの頂点だわ 潔い」

「ブレイクスルーする切欠も、バラギの無茶ぶりだもんな」

「ああ、懐かしいな」

話し終えたレオは着席して、その次に夢美が立ち上がり、話し始めた。

「先程、ご説明があつた通り、あたし『茨木夢美』は、同期ライバーである獅子島レオさんと入籍いたしました。レオはライバーとして活動していく中で、だらしな私生活はずっと支えてくれて、気が付いたら、彼の横にいることが当たり前で、心地よい場所になつていて、彼の隣でライバー活動している中で、彼に惹かれる自分がいて、そんな場所にずっといられたら……」と思い、彼の申し出を受け入れました」

「本当にだらしなかつたもんな……」

「レオに料理とかも教えてもらつたりとかあつたもんな」

「イケメンで、自分に優しく、愛してくれて、惚れるわな」

「自分を救ってくれた幼馴染だしな」

「これ以上、惚れない要素ないでしょ？」

夢美の言葉にコメントが流れながらも、みんな真剣に聞いていた。

「企業に所属するライバーとして、色恋沙汰と言うのは多くの問題が発生しうるリスクがあり、一般的には御法度という考えがあり、あたし達の関係には抵抗を感じる妖精や袁<sup>△</sup>の方々、あたし達以外のライバーを推している方々が、自分達の推しがあたし達と

同様なことになることを危惧されておられる方もいると思います。あたしもそうです。最初、レオに想いを伝えられた時は、そういう事を考慮して、自分の気持ちを抑えて、一度は断りました」

「確かにそこら辺、怖い話だよな」

「確かに確かに」

「もつと前に告白されていたのか！」

「レオ、フラれてたのか！」

「そして、みんながあたし達のことを認められるように、ライバーとしての知名度を上げて、みんなから認められるようになって初めて、その想いに応えようと約束しました」

そこからのアイドル時代の確執の解消等のレオの快進撃で、知名度を上げ、恋人関係に至り、最終的には武道館でのライブの後、正式なプロポーズを受けたことを明らかにした。

「漫画みたいな恋だな」

「そもそもその話が既に物語なんだよな」

「てえてえ……」

チャット欄では、一部ネガティブな発言があるものの、ポジティブな発言が占めていた。

夢美が話し終え、席に座り終えると、司会のかぐやが三期生達よりも前に立ち、話し始めた。

「にじライブを引つ張る立場として、この二人のデビューからずっと見てきました。彼らは、問題行動や壁にぶつかることがしばしば有ったが、それらをお互い支えあうことで乗り越えてきました。そして、二人が結婚したいって話を聞いた時、「遂にこの時が来たんやな」って……。本人たちの意志も強く、下手に二人の意志を抑えてしまうと、二人のライブとしての良さを潰してしまう可能性もありますし、会社の意向に沿わずに勝手に行動し、多くの皆様に多大なご迷惑をかけることも考えられました。勿論、にじライブ株式会社としても本人や社長を交えた会議や面談を何度もした結果、こうして皆さんに発表する結論に至りました」

かぐやの言葉に、その場にいる人は、圧倒されていた。

「皆さん、思うところは色々あると思います。先程、夢美が言ったように、他のライバーも同様の事態が起こりうるのではないかと思うことでしよう。今回につきましては、二人のライバー活動の中で積み上げてきた信頼があつてこそその結果です。他のライバーで同様の事態が起きた際にも、にじライブ株式会社は同様の会議や面談を行うことをお約束します。ですので、今後ともにじライブの活動をぜひともよろしく願います」

かぐやは深々と頭を下げ、視聴者の方々への理解を求めた。

「バンチョーがそこまで言うなら……」

「きちんとしてくれたら、大丈夫！」

「最後に……。二人とも、幸せになれよ。そして、これからもライバー活動をしっかりとしな。そして、レオ、浮気とかしたら舎弟が雁首揃えて燃やしに行くから、覚悟しいや。夢美、これからは色々忙しくなるけど、困ったらウチや他のライバー達に頼りなよ。絶対、力になるから。ということ、話を締めたいと思います。視聴者のみんな、長い

間、ウチ等の話を聞いてくれて、ありがとうな」

その後、バラレオのバーチャル披露宴を行う発表をした後、視聴者の質問コーナーになり、色々と惚気混じり、そこでもてえてえの材料になったり、小さな火種になったりしていたが、その会見に出演していた4名が各々の立場から、視聴者からの質問には誠意を持って答えたりするなどして、ネガティブな発言は全くないわけではないが、少し鳴りを潜めていた。

そして、レオと夢美の3Dモデルに改修が加えられて、左手の薬指に輝く指輪が追加され、バラレオの左手の甲を見せる入籍会見によくある光景とかも行われた。

SNS上でも、賛否両論ありながらも、バンチョーの発言や今までのバラレオの活動を見続けていた袁~~△~~や妖精たちは、概ね好意的に受け止められた。

それ以外の人は、一部炎上目的な人もいて、混乱はしたものの、公式アカウントにて、「両者対し、浮気等のスキャンダルが発生した際は、起こした方をライバーとして強制卒業させ、業界から全力で締め出す」旨の誓約書を作成し、他ライバーも同様の件が発生した場合は同様の誓約書を作成させると発表することで、一先ずの鎮静化の方向へと向かった。

「それじゃ、今後の二人の幸せを祈念して、乾杯!!」

「「「「乾杯!!」」」」

生放送終了後は、いつもの居酒屋に集まり、バラレオの入籍を祝うための宴会が始まり、そこにはバラレオのマナージャーや、二人の先輩・後輩ライバー、かつて「四天王」と言われた現在でもライバー界のトップを走るライバー達が集まっていた。

「おめでとうございます。いや、まさかライバー同士の結婚に踏み切るとは、流石だね」

「イルカさん、ありがとうございます」

「いやいや、私もそろそろ良い人がいれば結婚とかするけど、まだ相手がないから……」

「イルカさん程なら、選り取り見取りでしょ」

「いや。これがまた上手くないんだ」



「まひる、知ってるよ。3週間くらい前に、司とまひると林檎ちゃんとでオフコラボを私の家でした後、司が林檎ちゃんを家まで送るって言つて……」

「まひる先輩、それはっ!!」

「おい、誰か、まひるを止めろ!!」

「えっ、なんで？」

「これ以上は、まずい!!」

「ほう……。それは、良いこと聞いたな……。ちよつと、教えてもらおうか？」

「ヒエツ……」

各々が、二人の結婚祝ったり、結婚する秘訣とか、色々と聞いたりするライブもあれば、爆弾発言を繰り返すまひるの姿も有ったり、それを止めた林檎がかぐやに首根っこ掴まれて、強制尋問になったりと、かなりカオスな状況であった。

そして、宴会が終わり、バラレオの二人は、二人の新居として選んだマンションの部屋に戻り、入浴などを済ませると、精神的に疲労で二人ともすぐに「同じベッド」で横になった。

「あああああ、あ、疲れた」

「お疲れ様。でも、これからもつと忙しくなるよ。明日から実家巡りとか、結婚式の式場選びとか」

「あとは、ヴァーチャル披露宴もやるって、バンチョーが言ってたよな」

「こういうのは、やれることは全部試しにやっちゃおうってのが、会社の考え方みたいだし、特にこういうお祝い事は、する機会つてのは無いからね」

「そういうノリの良さが、にじライブなんだろうな」

「本当にそうだよね」

「それに、明日の夜は短時間だけど、きちんともう一度配信で報告しないとね」

「“新婚夫婦初配信”なんて、SNSで盛り上がっちゃってるよね」

夢美は、明日が来るのが待ち遠しいかのような表情で楽し気に語っていた。

そんな夢美を見ていたレオの表情も優しい顔であった。

「“司馬” 由美子さん、これから色々と苦労や壁にぶつかつたりすると思う。だから……」

「大丈夫。あたしと拓哉なら、きっと大丈夫。だって、“我ら、にじライブぞ？”」

二人は軽く笑いあい、不安を笑い飛ばした。

「でき……。今夜つて夫婦になつて、初めての夜なんだからさ……。ね」

夢美は、レオににじり寄り、レオの耳元で甘い声で囁いた。

「疲れたつて言ったのは、そっちだよ？」

「そうなんだけどさ……。今まで我慢してて、これでようやく、レオに思い切り甘えられる」

「付き合っている時も、盛大に甘えてたのに、まだ足りなかったのか」

「当たり前じゃない。もう、絶対離さないからね」

「まったく……。じゃ、今夜は寝かさないぞ、なんてな」

夫婦となつた二人は優しく抱き締め合い、お互いの温もりを求めあつた。

その後、眠りについた二人の表情は、未来への不安なんてまるでない穏やかなもので

あつた。

新たな環境であつても、二人の今後は明るいだらう……。

何故なら、この二人には支えてくれたり、応援してくれたりする人が多くいるのだから……。

## エーデルワイスをもう一度

「拓也、今日は久しぶりに配信を休んで、『ピクニックしよう』って言い出したけど、どこに連れていくの?」

「まあまあ、それはついてからのお楽しみだから」

「拓也のことだから、変なところには連れて行かないとは思うけど、そこまで秘密にされるとね」

バラレオの二人は、動きやすい服装と二人分のお弁当やレジャーシート等を詰めたリュックサックを背負い、

「今日は、由美子とここに来たかったんだ」

「ここにっつて……。『動物園』……?」

拓也が指さした場所は、都内にある動物園であった。

「そう。配信ばかりで、ストレスも溜まっちゃうから、たまにはこういうのもいいと思っ  
てね。平日の昼だったら、人もあまりいないだろうから、人混みが嫌いな由美子にも大  
丈夫かなってさ」

「ん〜。確かに、案件とかも多かつたし、たまにはってことだったら、良いかもね。あれ、  
でも……」

由美子は、拓也の誘った理由に納得しながらも、どこか釈然としない気持ちに包まれ  
た。

「それだったら、もっと近い動物園とかにすればよかつたんじゃない？ わざわざ、ここ  
まですることってないんじゃない？」

「まあ……。それについては、後々教えるから、ひと先ずは動物園見学をしようぜ」  
「なんかはぐらかされてるけど、拓也なりに考えたことだから、久しぶりのデートを楽し  
みますか」

その後、二人は動物園の展示スペースを見て回り、二人でお弁当を食べた後、少し低

い柵が立てられているやや広めの広場に到着した。

「ここが、今日、由美子と来たかった場所なんだ」

「ここが？」

「うん。あの看板を見て」

「何々……。『動物ふれあい広場』……」

レオがどうしても連れてきたかった場所は、小動物と直接触れ合えるコーナーであった。

「でも、どうして？」

「俺たちさ、今でこそ、こういう関係になって、幸せを築いているんだけどさ。小学校時代は、なんだかんだで喧嘩別れしちゃったみたいなものじゃん」

「喧嘩別れって、あれはあたしが勝手に拓也のことを一方的に……」

「でも、それでもあの時のことが有ったから、今の俺達が有る。それがさ、どうしても心のコリみたいになっちゃってな」

レオは、小学生時代のことを思い出しながら、静かに言葉を進めた。

「過去は変えることはできないし、やり直すことはできないけど、『思い出』だけはやり直すことはできるかなって……。あの時の由美子が、どれだけ辛かったことだったのに分ってる。でも、あの時出会わなかったら、由美子とここまでの関係にならなかった」

レオは、昔を思い出しながら、ゆっくりと続けた。

「だからこそ、もう一度、俺たちが出会ったあの時をやり直したかった。これは完全に俺のエゴ。だから、傷ついたら……」

「今日は楽しかったよ」

拓也の謝罪の言葉じみてきた言葉を、由美子は柔らかな言葉で遮った。

「確かにちよつとモヤつとしたけど、ウサギ撫でてたら、めちやちや癒された。それに拓也が私のことを大切に思ってくれてるのは、ちゃんとわかっているから」



少し悲しげな顔をする拓也をなだめるように、由美子は言葉を続けた。

「あの時はめっちゃくちや辛かった。全てが憎かったし、絶望してた」

少し苦々しくも、思い出さたくない過去を思い出しながらも語った。

「それに、あの時の拓也は鬱陶しかった。私は、一人になりたかったのに、しつこく絡んできて、鬱陶しかった」

「そ、それは……」

「でも、そんな過去が無かったら、拓也はアイドルになろうとしなかったし、私たちは結婚することはなかったと思う。だから……」

由美子は、少し照れながらも拓也に抱き着いた。

「世界一幸せにしてよ……」

抱き着く力はどこか強く、もう離さないという彼女なりの想いでもあった。

「当たり前だよ」

拓也は優しい声色で答え、由美子の頭を優しく撫でた。

「フフツ……。くすぐりたい」

その後、帰りに某激安量販店に寄り、お互いの私物を購入して帰路に就いた。

帰りの二人は、荷物を持っていない空いた手は、お互いの手の指の間に指を絡めあっていた。

自宅に帰った二人は、拓也お手製の食事を取り、お酒も少々入り始めていた。

「はあ。おいしかった」

「うん、今日の味付けも上手くいったな」

「本当に、拓也の料理が上手くなって、嬉しいな〜」

「また、一緒に料理しような」

「へ〜い」

少し酔いの回った二人は、歓談しながら、楽しい時間は過ぎていった。

「そろそろ、良いかな〜?」

「ん、何が?」

楽しい時間が少し経った後に、由美子は、先ほど購入した激安量販店の袋から、カチューシャを取り出し、手早くタグ等を取り外して装着した。

そのカチューシャには、フワフワな毛で覆われたウサギの耳の装飾が付いており、由美子の寝間着とも相まって、昼に触れあったウサギのようであった。

「ん? どうした?」

「拓也、今、あたしはウサギよ」

「ほうほう、それで?」

拓也はわざとらしく聞くも、内心ワクワクした表情であった。

「ウサギは、寂しいと死んじゃうくらい繊細な動物なんだよ。だから、私は今寂しいよ」  
由美子は酔いが回ったせいか、いつもとは考えられない程の誘い文句を拓也に投げかけ、拓也の胸に顔をうずめた。

そんな由美子を優しく抱きしめ、ゆっくりと優しく頭を撫でた。

「それじゃ、今日は精一杯ウサギを可愛がるとするか」

「私が満足するまで可愛がりなさいよ、フフツ」

「勿論、絶対に幸せするよ」

二人はしばらくそのまま抱きしめ合い、お互いの温もりを感じ合っていた。

「ねえ、もつと愛してよ、拓也。まだまだ足りない……。もつと、ちょうだい」

「……」

拓也は、由美子を少し強く抱き寄せて、彼女の唇に優しく唇を落とす。

「んっ……」

夜の帳は落ちたが、二人だけの世界はこれから開幕のようであった……。

その後、何をしていたかは、当人にしかわからないが、由美子はどこか肌ツヤが良く、拓也はどこかヤツれた顔になっていたということだけは、登校前にたまたま二人を見つけた隣人のケイトには、すっかりバレており、あまりのてえにより、彼女はその場で膝をつき、過呼吸になりそうであった。

（二人だけの世界が開幕した同じ時間。一方、その頃……）

「（。ム。）ハッ！ 今、どこかでバラレオの二人がてえなことしてる!! しかも、これはかなりのてえだ！」

コラボ配信の準備をしようとしていた林檎は、どこぞのニュー〇イプよろしく、どこかで発生したてえを感じ取って身悶えていた。

なお、その発言を通話で聞いた司が「何やってるんですか？」と冷静にツツコミを入れていたのは、その場にいた二人しか知らぬことであった。